
クロスフォード王国乱入記

ゼロたいむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロスフォード王国乱入記

【Nコード】

N5102Q

【作者名】

ぜろたいむ

【あらすじ】

世界的VRMMORPG、アルヴァトロス。

そのプレイヤーであった工藤信弥は、相棒と共に何故かそのゲームのデータを引き継いだ状態で異世界に召喚される。

どうやら魔王を倒す為だったらしいが、魔王は既に討伐された後という珍妙不可思議な状況で、彼らは果たしてどうして行くのだろうか。

……一応方向性は決まっていますが、そこまで辿り着くにはまだ時

間がかりそうです。ご容赦を。

同時にこの俺……平凡な大学生である工藤信弥がこの世界に召喚された時に何故か手に持っていた装備でもある。他にも幾つかの装備、アイテムなどと一緒に召喚されているが、そちらについては詳細は省かせて頂こう。

そして一緒に召喚された相棒もまた、一本の日本刀や幾つかの装備類と共に召喚されていた。

更に駄目押しのように、『勇者殿達もお疲れでしょう』と案内されたこの部屋で一人になって気付いた事実。

目を閉じて意識を集中すると脳裏に浮かんでくる、意識の切り替えスイッチとでも呼べば良いのか。まあ、便宜上はスイッチと呼ませて頂く。

一人になって、現状を整理しきれずに茫洋とした頭でそのスイッチを押してしまった瞬間、眼前に表示された見慣れたステータス画面を見て気絶しなかった俺を褒めて頂きたい。

そう、これら意味する事とは何か。

いずれ王様の話を聞いて、内容を補強しないとイケないだろうが……。

「……異世界召喚。それもゲームのデータ引き継ぎ……」

どこの漫画や小説だと、乾いた笑みを浮かべるしかない。

その乾いた笑みを断ち切ったのは、ドアの外からノックと共に聞こえて来た声。

聞き慣れたテノールボイスが俺の元に届いたからだ。

「起きているか」

「……寝れるかよ」

「そうか。不眠症か？」

飄々と言いながらドアを開けて入って来る姿は、俺よりは些か年上。二十代の半ば程度の年齢に見える青年だ。

黒髪黒目。デフォルトで眉間に皺を寄せている近寄りがたい印象の男だが、それさえ除けば相当な二枚目だ。平々凡々である俺とは違う。

……ああ、残念な事にゲームデータを引き継いでいるようだといえ、外見は現実世界の物をそのまま引き継いってしまったようだ。ゲームのAvatarは、殊更美形を選んだつもりは無いが、少なくとも俺より美形であっただけに悔やまれる。いずれ神に会ったら殴る回数を一回増やそうと心に誓う。

話が逸れた。

この些か険のある美形が、先程も言ったどういうわけか一緒に召喚された俺の『相棒』だ。

名を鹿島九郎。アルヴァトロスにおけるキャラクター名はクロウ。まんまである。

背丈も年齢も俺より少し上。召喚された時に着ていた鎧は脱いだらしく、今は洋風の平服で腰に日本刀を差した、些か妙な和洋折衷と呼べる姿だ。

数年前にゲームの中で知り合い、ゲーム内ではほぼ一緒。外でも幾度となく一緒にいるんで遊んでいた、腐れ縁と言い換えても良い間柄。それが俺と九郎の間を表現するのに最も相応しい言葉だろう。

「さて、困ったな。王様も随分困っていたようだが、俺達とてこの状況には困るしかあるまい。信弥、お前はどうか？」

「困ってる。……同時に現状確認をして、この置かれた状況に自分の正気を疑っている所だ。頬をつねって痛かったけど、それでも夢だと言われた方が説得力があるね」

「ふむ、では参謀殿は俺よりも些か良く状況確認が取れていると見

る。何か分かったのか？」

「……一応な」

参謀殿などと茶化した呼び方をして来る九郎には、困っている様子は見受けられない。

常にしかめっ面で、しかし飄々とした態度を崩さない男である。つまみ始めてこの方、俺はこいつが本気で困っている姿など見た事が無い。

恐らく、俺達がゲームデータを引き継いでいる可能性などを話しても変わるまい。

「……まあ、百聞は一見にしかずだ。目を閉じて意識を集中してみる。スイッチか何かのような物が見えないか？」

「ふむ？」

どうせこいつの態度は変わらないんだろうなー、と半ば投げ遣りに思いつつ。

先程発見したステータス画面の表示方法を九郎に教える。

数秒ほど待つて、『ほう』と感心するような声。

九郎は眼前の何も無い空間を見て、しきりに頷きを繰り返している。

どうやら表示されたステータスは、他の人間には見えないようだ。

「成程、ステータス画面か。となれば俺が武器一式を纏った状態で召喚されたのも頷ける。何だこれは、アルヴァトロスはいつの間に斯様なバージョンアップをしたのだ？」

「んなワケあるか。さっき、城の人達と話ただろ。お前はあれが、プログラムされたデータの反応だと思うか？」

「有り得んな。昔に比べて技術は進歩したと聞くが、それでも有り得まい。あの有機的な反応は、どう考えても生身の人間のそれだ」

九郎と一応の意見の合致を見る。

この部屋に通される前に、王様だという中年男性——ただし、王と言うよりどこぞの会社の課長職辺りが似合いそうな、中年太りの小柄なオッサン——は、愛嬌のある表情に可哀想なほどの動揺を乗せて、俺達に平謝りで謝って来た。

それに加えて、その平謝りの王様を慌てて宥める周囲の城兵や従卒。

あれがプログラムされた対応だとはとても思えん。
ましてや百万歩譲ってプログラムだとしても、俺や九郎がリアルそのままの姿をしているのはどう考えても不自然だ。

「九郎、お前は小説は読むか？」

「伊勢物語なら……」

「常々思うが、お前はいつの時代の人だ。……まあ、小説や漫画なんかで良くある異世界召喚モノのテンプレの一種だよ。勇者として何かの力を持って異世界に召喚されましたー、ってのはな。俺らの場合、その力つてのがどうやらアルヴァトロスのデータらしいが」

「ならばここは、アルヴァトロスの世界なのか？」

「さてな。情報が足りないから何とも言えん」

『ふむ』と考え込む九郎。

正直言つて、こいつが居てくれて助かった。

こいつが常のペースを崩さないからこそ、俺も恐慌を起こさずにいられるのだ。

どことも知れない世界に知り合いも無くただ一人とか、それで平静を保てるほどに神経は図太くないつもりだ。

ともあれ、その思考に沈んでいる様子の九郎に対して、俺は苦笑しながら言葉を投げる。

「更に言うと、『魔王を倒したら帰れます』みたいな話になるのが
テンプレの中のテンプレなんだがな」

「魔王か。だが、それはもう倒されたのだろう？」

「らしいな。その辺の事情まで含めて、明日辺り詳しく聞く必要がありそうだ」

「余り虐めるなよ。あの王様、可哀想に我々に対して恐縮しきりだったではないか」

「いきなりこんな場所に呼ばれて『帰れません』だ。怒鳴って暴れても許されると思うがね」

投げ遣りに言いながら、俺は意識を集中してステータス画面を開く。

名前欄は【アルバート・ディオスクロイツ／工藤信弥】。クラスは魔術師系の最高位職の一つである【賢者】。レベルは【500】。500というのは、アルヴァトロスの現在のバージョンにおけるレベルとしての限界値だ。

とはいえ、全体で言えば上位一割のプレイヤーがこのレベルであるという話もあるし、これだけでは劇的に凄いわけではない。

レベル500の中でも装備やプレイヤーの技量の関係で、実力差はまちまちだ。

俺がレベル500の中では平凡なプレイヤーなのに対して、九郎は些か異常なプレイヤーと言えるだろうが、そこに関しては後述させて頂く。

現状の問題は俺や九郎の強さよりも、不透明過ぎるこの状況だ。

「……現状、この城の連中は俺らに対して友好的なようだ。だけど、俺達が本当にゲーム内そのままのスペックを引き継いでいるかも分からなければ、今後の立場がどうなるかも分からない。色々調べ必要がある。油断するなよ」

「分かった。……しかし、この状況に自分の正気を疑っているなど

と言いつつ、随分と慎重に事を進めるな？」

「夢なら夢で、覚めるまでせめて前向きに生きた方が良い。起き抜けの頭で気を回し過ぎた自分を笑ってやるさ。ただ、そうじゃない可能性が僅かでもある以上、俺は生存の為の努力を惜しまないぞ」

「——生存か」

「ああ」

俺の“生存”という言葉に、九郎が口の端を吊り上げる。
何故笑えるのか、その神経が正直羨ましい。

そもそも、“生存の為の努力”という言葉が出るのは考えてみれば当然の話だ。

俺達是对魔王用の戦力として召喚された。つまりは、荒事担当として呼び出されたのだ。

ここがゲームの世界だろうとそうでなかつと、戦いや争いにおいて怪我や死というのは付いて回る事柄だ。

魔王が討伐されたと言うならばその危険は減るのかも知れないが、だからといって楽観視は出来ない。

ここは中世ファンタジー世界。命の値段は、現代日本に比べて格段に安いだろう。

迂闊を行って死ぬのは御免被る。ここがゲームの世界かどうかは未知数だし、ゲームの世界だとしても復活できる保証はどこにも無いのだ。

自分の命で試すのも、これまた御免被りたい。となれば生存の為に手を尽くすのは当然だろう。

「さて、どうなるかな。些かならず、今後の展開が楽しみになって来たぞ」

「お前は改めて戦国時代辺りに生まれたら、絶対に名を残す人材だ

と確信したよ。その神経の太さが羨ましいね」

「後世の学生の試験で頭痛の種になったり、俺を描いた絵に落書きされるのは御免だな」

「……教科書に載るレベルで名を残すのかよ。信長秀吉家康レベルにまでなり上がる気か」

呆れた声を上げる俺に対して、九郎は楽しげに声を上げて笑う。

こいつの神経の太さに救われる事もあつたし、この状況では頼もしくもあるのだが。

余りの泰然自若ぶりと天与の神経の太さに、俺が少々不公平を感じたとしても不思議はあるまい。

とりあえず俺にこいつ並の神経の太さを与えなかったという事で、もし神に会った場合の殴打予定数カウントが更に一回増えたのは言うまでも無いだろう。

[illegible]

お初にお目にかかります。

然程技量の無い素人が、身の程知らずにも投稿させて頂きます。

VRMMOからの異世界召喚とか、何番煎じかも分からない題材ですが、多少なりとも楽しんで頂ければ幸いです。

どうぞ宜しくお願いします。

第二話：王国の皆様と

翌朝。

とりあえず、質素なベッドなのが逆に功を奏したのだろう。

九郎と話した後、奴が部屋に帰ってすぐに熟睡してしまった俺は、起き抜けのぼんやりとした頭で窓を開けて外を見ていた。

昨日は召喚された時点で夕方であり、部屋に通された時点で夜だった。

その事から外の風景はロクに見れなかったわけだが、こうして見ると改めて此处が現代日本ではないと感じられる。

窓の外に広がる光景は、雄大な山と裾野に広がる森、そして広大な草原という、素晴らしき大自然だったのだ。

これほどの風景、二十二世紀の日本においては中々望むべくもない。

ましてや空気の澄んでいること澄んでいること。現代日本に生まれ育った身としては、これだけでも異世界って良いなあと思ってしまう辺り、俺はもしかしたら途轍もなく安いのかも知れない。

そんな益体も無い思考に浸っていると、不意にドアがノックされた。

「起きているか？ 信弥」

「起きてるよ。入って良いぞ」

「うむ。……む、何だ。窓の外の光景でも見ているのか。確かに見事な大自然だな。曾祖父の住んでいる田舎を思い出す」

「……………」

先程の思考を訂正しよう。

二十二世紀の日本でも、どっかの田舎ではこんな自然は残っていたらしい。

案外、捨てたもんじゃなかったのかもしれない。

その後少し聞いてみたところ、どうやら九郎は俺よりも早く起きていたらしいのだが、一通り自室で行えるトレーニングを終えた辺りで暇になって遊びに来たらしい。

既に普通に自分の家感覚である。こいつの揺るぎ無さは本気で尊敬に値すると思う。馬鹿だとも思うが。

ともあれ、男二人で大自然を眺めてあーだこーだと論評する不毛な時間は、程無くして終わりを告げる。

「失礼いたします」

控え目な、どこか怯えたような声がドアの向こうから聞こえたのだ。

弱いノックも扉から響いて来る。

女性の声。それも大分若い。

「王がお呼びです、勇者様。お食事の時間でもありますので、もし宜しければご足労願えませんか？」

その言葉に、俺と九郎は顔を見合わせる。

そう言えば、昨晚から何も食べていない。

思い出したように二人合わせて腹が鳴ったのが可笑しくて、二人揃って笑い声を上げた。

……ドアの外で待っている女性——後で聞いた所によると宮仕えのメイドさん——がその笑い声に怯えていたのには、本気で落ち込んだ。

[illegible]

一般的な4LDKにおけるリビング程度の広さしかない食堂で、王様は開口一番俺達に向けてこう言いながら頭を下げた。

愛嬌はあるのだが、こつも気弱だと一国の王として大丈夫なのかが不安にならざるを得ない。

人が良さそうで、押しが弱そう。現状での王様に対する印象は、言ってしまうばこんなもんだ。

そう言つと、王様は安心したように頷いた。

ハッキリ言うと、九郎ならばベッドが無くても屋根と壁さえあれば安眠出来るに違いない。

が、流石に『こいつにはベッドや家具は上等過ぎますので、もっとランク落としてもOKです』とは言えないので放置。俺としても下手に豪華なのは落ち付かない性質なので、これで構わない。

そして王様から出て来た最初の話題が終わった辺りで、俺は改めて周囲を見回す。

部屋には円卓。その上には、スープやサラダ、そしてパンといった朝食が載っている。

中世という事で食事は然程期待していなかったのだが、『中世』ではなく『中世風ファンタジー』であるという事か。そう悪くは無さそうだ。

ご都合主義だが、食事の質が良いに越した事は無いので文句は無い。

これで外見だけ良くて味はゲロマズだったりした場合、神に対する俺の殴打予定回数が5、6回増える事になるだろうが、
げに恐ろしきは食い物の恨みである。

ともあれ食事に対する考察よりも重要なのは、その円卓に座っている人間だ。

恐らく“勇者（笑）”である俺や九郎と食事を共にする以上、王様側としても紹介しておきたい人間という事だろう。

彼らとの関係は今後の進退にも関わって来る可能性が高い。人物の見極めをしておいても、損はあるまい。

円卓という構造上、座る位置における上位者・下位者の判断は不可能。

服装も、楽そうな——恐らく木綿で出来た平服だ。こうして見ると、王様が言った『貧乏だから』という言葉が真実味を帯びて来

る。

恐らく国家の重鎮達であろう者達が、揃いも揃って質素な装いをしているのだから。

だがそんな質素な人達の中でまず目を引くのは、紫銀の髪を肩まで程度に伸ばした強気そうな長身の女性だ。

面白そうに瞳を輝かせてこちらを見ているその反応は、他とは一線を描く。

この表現は些か失礼かもしれないが、『新しい玩具を前にした子供』という雰囲気が一番表現し易いか。いや、見た目的には俺とそう変わりが無いであろう年齢の女性にこの表現は失礼だろうが。

腰には柄に綺麗な装飾された剣を差しているので、武官かもしれない。

見目麗しいと表現しても差し支えは無いだろう。些か気が強そうな点が好みに分かれるかもしれないが、十人に聞けば九人までが『美人』と答えるだろう容貌だ。

だが、他が警戒する様子を大小の差はあれど見せている中、露骨に楽しそうなこの女性は完全に浮いていた。

そして警戒と言ふなれば、彼女のほぼ対面に座っている男性がその最たるものだろう。

こちらにも剣を腰に差しているので武官だろうが、滑り止めの布を柄に巻かれたその剣は完全な実用一辺倒だ。

年齢は三十路か四十路か。西洋人風の顔立ち故に判断はつきにくい、そう外れているわけでもないだろう。

灰色の髪を短く刈り上げ、口髭を生やした無骨な男性だ。体格も長身の九郎より更に良く、見るだに質実剛健の武人という表現がしっくり来る。

ついでに言うと王への忠義は篤いらしく、王様が俺達に頭を下げている時には俺達の反応を射殺さんばかりの視線で見つけていた。

腰を浮かして、剣の柄に手をかける始末だ。『王に何かあらば生かしては帰さん』と、言葉にせずとも視線が語っていた。素で怖かった。

その武官殿程ではないが、次に俺達を警戒している様子なのは、彼の隣に座る女性だろう。

藍色の髪を腰ほどまで伸ばした、四角い眼鏡をかけた小柄なインテリ風の女性だ。

歳で言えば、九郎よりも年上だろう。三十路には届いていないだろうが、四捨五入して二十になる年齢かと言われれば首を傾げざるを得ない。無論、東洋人が西洋風の顔立ちの相手の年齢を判断した所で、間違っている可能性も大いにあるのだが。

武官殿と違い、こちらは値踏みという表現がしつくりくる視線だ。探るような目で見て来るのは、まあ当然だろうし悪印象は無い。

剣や槍など持てなさそうな細腕から察するに、文官か魔術師か。どちらにしろ、ここで俺達を簡単に受け入れるような心根でやっていけるような職業ではないと思うのは俺の偏見だろうか？

そして最後の一名は、些か神経質そうな面立ちの白髪の壮年男性だ。

俺が王様と会話するまではこちらを眺めていたが、それが終わった辺りで興味を失ったのか何らかの懸念でも晴れたのか。

こちらを伺う様子は見せず、行儀良く座って食事の開始を待っている。

態度で見るならば、一番大物臭い。何も言われずに王様と横に並べられたら、俺は確実にこちらが偉いと判断するだろう。

見たところ武器などは携帯していないが、体格もそう悪くはない。武官か文官か、それともそれ以外か。

現状では判断が付きかねる。

「それじゃ勇者殿。自己紹介と行きましようか？」

どうやらこの国は作法には拘らない国らしい。

食事開始とほぼ同時、フォークをサラダにブツ刺しながら声を上げたのは紫銀の髪的女性だ。

文官らしき女性が小声で「行儀が悪い」などと嗜めているが、そこはスルーしている。

逆説、嗜めたのがその女性のみなのだ。作法に拘らないという判断は間違っていないだろう。

そして文官らしき女性の言葉をスルーしたまま、紫銀の髪的女性はこちらに笑いかける。

「私はリゼル・フォン・クロスフォード。この国の王女様って事になるわね」

「王女。……王女？ ……王女オ！！？」

「ええ。大変不本意ですが」

てつきり武官かなーと思っていた俺だが、予想外の自己紹介に思わず声を上げる。

更には、本当に不本意そうな文官風の女性の言葉がそこに重なった。

……予想できなかった俺の思考が甘いと言わないでほしい。似ていないのだ。全然似ていないのだ、王様とこの王女様は。

ころころ丸っこい愛嬌のある中年オヤジの娘が、このネコ科の肉食獣のような笑みを浮かべた王女様である。

まさか誰も、丸々太ったペンギンから虎が生まれるなどとは思っていない。

半ば啞然とする俺の反応が可笑しかったのか、王女——リゼルはくすくすと楽しそうに笑う。

その仕草だけ見ていると、確かにどこか気品のような物が感じられなくもない……と、思うのは彼女の地位を知ってしまったが故の固定観念だろうか。

「へえ、やっぱり勇者殿でも驚くんだ。まあ、私と父上は本当に似てないからね。無理も無いけど」

「王女様、そのような趣味の悪い脅かし方は相手を選んで下さい。相手は勇者殿ですよ」

「そうね。……ふふっ、悪い癖だったわ。申し訳ありません、勇者殿。脅かしてしまいましたか？」

ころころと笑う彼女に対し、制止の声を入れたのはまたも文官の女性。

彼女の言葉を聞き、リゼルは楽しそうな様子を隠さないままではあるが、俺達に謝罪を向けて来る。

実際問題、別段こちらが怒る理由も無い。貶されたわけでも何でもなく、悪戯好きの王女様によって軽く脅かされただけなのだ。

むしろ、勇者を立てる為に王女に自制を要求する文官の女性の言葉の方が気になる所だ。

この世界において、俺達はどんな立場なのか。『勇者』という曖昧な言葉で納得したままで居て良い問題ではないだろう。

ここは一つ、王女の言葉に対する答えがてら、対応を見てみるとする。

「驚きましたが、こちらこそ謝罪すべき場面ですよ。大仰に驚いてしまい、申し訳ありませんでした。王様にも王女様にも、同席の皆様にもお詫び申し上げます」

「……いえ、お構いなく」

過剰にへりくだった物言いに對し、返って来たのは王女や王様まで含めた驚きの反応だ。

特に俺達を最も警戒していた武官風の男は、口をポカンと開けている。

——成程。ある程度は読めた。

つまり魔王の居ない状態での『勇者』は、『危険物』とほぼイコールで結びつけられる関係か。

となれば、その辺りをもっと詳細に聞き出さねばなるまい。

「改めまして、名乗りが遅れました。王女様に先に名乗らせてしまった事、まずはお詫び申し上げます。私は工藤信弥……この国風に名乗りますと、シンヤ・クドウとなりますね。こちらはクロウ・カシマです。以後、お見知りおきをお願い致します」

「……ケイト・エルヴァンシアです。財務官を務めております」

「……ヴァニングス・クロイツだ。騎士団長をしている」

「オーギュスト・クレイム。宰相」

些か過剰に猫を被った俺の名乗りに對して、返ってきた言葉は三つ。

文官風の女性が、驚いたような表情のまま。

武官風の男性が、毒気を抜かれたように。

そして立場の読めなかった壮年男性が淡々と、各々の名と立場を名乗る。

宰相と言う事は、オーギュストと名乗った壮年男性が文官のトップであり、ケイトはその部下……この場に呼ばれている事を考えると、実質的なこの国の文官のNo.2か。そこまで行かなくとも、かなり高い立場なのは間違いない。

ヴァニングスと名乗った男は、騎士団長。こちらが武官の長か。

まあ、文武の重鎮が集められているという点では予想通りだ。
故にこそ、この場で聞かねばならない事、決めねばならない事は
幾らでもある。

「ご丁寧ありがとうございます。それでは、皆様に一つお聞きし
たいのですが」

だがその中で、差し当たって最も重要で、俺達の今後に関わって
くるのは一つ。

「皆様は私達をどのように処したいとお考えですか？」

この国における俺達の今後の立場、だ。

第二話：王国の皆様と（後書き）

……何故か話が余り進んでない不具合（´・ω・｀）

3 / 3 0、王女『殿』という敬称はおかしいとの指摘を受けた為改稿しました。

大変申し訳ありませんでした。

第三話：そして彼女の事情（前書き）

今回は主人公（信弥）サイドではなく、王国サイドからのお話です。
説明が多くて話が進んでいないのは仕様です。お察し下さい。

第三話：そして彼女の事情

■ Side ケイト ■

正直に言おう。

私は王国連合の手で発動された勇者召喚計画には最初から反対だった。

八つの王国連合で巨大な魔法陣を描き、魔王に対抗すべく勇者を召喚する。

各々の王国に召喚された勇者達は協力し合い、魔王を倒して元の世界に戻る。

召喚は各国が協力して、数日ばかりで巨大な魔法陣に魔力を供給して。

召喚よりも魔力の必要な送還は、魔王を倒した時に魔王が蓄えていた魔力を利用する形で行われる……と言うのが、この計画の主旨だ。

しかしこの計画。二重の意味で気に入らない所は、異世界から来た勇者にこの世界の命運を丸投げする形になる事である。

まず、この大地に生きる民としてその発想は度し難いと思う。

可能ならば自分の事は自分で解決すべきなのだ。

可能かどうか試す前に異世界人に頼ろうなどと考えるから、召喚の儀に先だって送っていた斥候部隊（生還は絶望視されていた）が魔王を倒してしまったなどと言う喜劇が起きたというのが私の意見だ。

魔王が蓄えていたであろう魔力も、倒されて時間が経過したならば勝手に霧散している事だろう。

これでは勇者達を送還する事など出来はすまい。

各国が協調して目的の為に邁進すればそれも可能かもしれないが、『魔王』という共通の敵がいなくなったのだ。

果たしてこれ以降、魔王討伐前のような協力体制を各国が築けるかは極めて難しいと言わざるを得ない。

そしてもう一つの気に入らない理由。

それは主に実務面での理由だ。

勇者と言えは聞こえは良いが、言ってしまうえば彼らは“魔王すら打倒し得る程の戦力”ではない。

それ程の力を持った相手が我々の言う事を聞けば良し。だが、聞かなければ？

最悪の場合、魔王と同等の脅威となる事すら考えられるのだ。と言つより四百年前の文献では、召喚された勇者が八王国の一つに対して反旗を翻し、討伐されるも国軍に大打撃を与えたという伝説が残っている。

その時は残りの勇者で魔王は退治されたようだが、このような事がまた起こる可能性があるのだ。

そんな博打、一国の政治に深く関わる身としては到底承服しかねる。

とはいえ、八王国連合の盟主会議で決まった事だ。

我が王は私やヴァニングスの言を信じ、反対の立場を取ったそうだが……押し切られたのだろう。

あの押しの弱ささえ無ければ名君と言えるのだが、それは仕方ない。

我が国は八王国の中でも領土・武力・産業のいずれを取っても最弱の国家だ。発言力は最も低い。下手に強硬に反対すると、面倒な事になっていた可能性が高い。

だがまさか、ここ数十年の間世界を脅かしていた魔王は斥候隊の手であつたりと討伐され、報告の遅れもあつて勇者達だけがこの世界に残るなんて間抜けな事態は想定していなかった。

誰も斥候隊が魔王を討伐するとは思つてなかったのだから、仕方ないと言えばそれまでだが……。

勇者達の魔王討伐の前に、少しでも情報を得る為にと決死の覚悟で向かった斥候小隊。現在、彼らは所属国である武の国ルウガルウにて、英雄として遇されていると聞く。

っていうか、斥候小隊に負けるってどれだけ弱かつたんだ魔王。

過去の歴代魔王が本気で世界を滅ぼす寸前まで行つてたんで、私達はその影に怯えていただけなのだろうか。

だとすれば、間抜けな自分達に泣きたい。

まあ、それは今は良い。

間抜けな自分よりも大きな問題が目の前にあるのだ。

召喚されてしまった勇者の処遇である。

召喚とほぼ同時に飛び込んできた魔王討伐の報のおかげで、我が王が最初に行った事は召喚された勇者への平謝りだったと言う有様だ。

確かに勇者の機嫌を損ねるのは怖いが、一国の王がその態度なのは如何かと思う。

幸いにして、勇者がそれを元に王を侮る態度を見せる事はなかったが。

召喚された二人の勇者はいずれも男。険のある表情の武人風の男と、杖を携えた魔術師風の男だ。

どうやら二人は召喚される前からの知り合いのようで、『なんだその装備』『ここはどこだ』などと二人で色々と言ひ合つていたが、少なくともこちらに対して積極的な害意を見せる事はなかった。

召喚に対して混乱しているからであつて、時間を置いて落ち着け

ばこちらに反旗を翻す可能性は無くも無かったが、誰彼構わず噛み付くような狂犬の類ではない様子なのは不幸中の幸いだ。

勇者が伝承通りの実力を保有しているならば、我が国の貧弱な軍備では止め切れまい。

そして、いきなり召喚された拳句に『帰れません』という言葉に対して、彼らが激昂しない証拠はどこにも無かったのだ。

魔王出現後に頻発していた魔物との戦いで、列国から“戦姫”などとも呼ばれる王女様ならば可能性は無くもないが……試そうとは思わない。

そして対応に苦慮しつつ、迎えた翌朝。

私やヴァニングス、そしてオーギュスト様に王女様といったこの国の重鎮達を集めて、王は言った。

「勇者殿達に、まずは皆を紹介しようと思うんだ。えーと……そう悪い人には見えないし、とりあえず互いに向き合って話さないとうにもならないし……」

自信の無さそうな言葉だったが、確かにその言葉には一理ある。彼らも一晩の間は大人しくしていたようだし、細かい事情説明はどの道必要だろう。

余りにも腫れ物に触るような対応を続けると、逆に反感を抱かれる危険が高い。

私とオーギュスト様はそのような判断から。王女様は……恐らく100%好奇心から、王の言葉に同意する。

唯一渋ったのはヴァニングスだ。

忠義一直線なこの堅物騎士は、万一の場合の王の身の危険を声高に説き、周囲の説得で折れる際にもこう言ったのだ。

「……万一奴らが王に危害を加えようものならば、刺し違えてでも

止めて見せる」

勘弁してくれと言いたかった。むしろ言った。

何が悲しくて相手を懐柔する必要がある対話の席に、いざとなったら斬りかかる気満々の脳筋を連れて行かねばならないのか。

とはいえ王の安全の確保の面もあるし、文官としてのトップであるオーギュスト様と私が出るのに、武官のトップであるヴァニングスが会談の席に出ないのもおかしい話だ。

結局私は王と一緒に、『大丈夫だからこちらから挑発するような真似は絶対にするな』と何度も言い含めるしかなかった。

更に言うなれば、本気で楽しそうにしている王女様を見て胃が痛くなった。

文武共に傑出した才を持つ王女様だが、刹那的と言うか場当たり的な性格で、他人をおちよくるのが大好きなのが唯一最大の欠点だ。それさえ無ければ引く手数多だろうに、21にもなって未だに結婚のアテの一つも無いのはどうなのか。

……いや、それを言ってしまうえば王女様より5つ上で未婚の私の立場が無いので、その思考はここで取り止める。

とにかく最大の問題は、場当たり刹那思考な王女様が勇者達に粗相を働かないかと、忠義馬鹿のヴァニングスの態度が相手の神経を逆撫でしないか。

出来得る限りのフォローはするつもりだが、最悪の事態を考える
と会見前にストレスで倒れそうだった。

しかし、そんな私の心労に反して、勇者達は予想外に友好的で大人しかった。

王が部屋の質素さを心配する発言——ちなみに、うちの国は王城に金をかけない。あれでも良い方の客間なのだ——をすると、

魔術師風の勇者の方が苦笑しながら応じて曰く、

「お心遣いありがとうございます、王様。ですが私達は召喚される前は……言ってしまうえば平民の立場に居る者でした。返って今くらいの方が落ち付きますので、是非とも部屋はこのまままでお願いします」

柔和にそう言われて、王も酷く安心したようだ。

正直言つと、私も随分と安堵した。この場でなければ、へたり込んで盛大に溜息を漏らしたかつたくらいだ。

どうやらこの勇者は平民出身などと言っているが、如才無い返答と低姿勢な対応を見るに、相応の礼義と学はあるらしい。

だが同時に、王への対応が終わった辺りから、彼の視線はこちらに向けられている事に気付いた。

私、ヴァニングス、オーギュスト様、そして王女様。

見られていると判断した私は、些か後ろめたく視線を逸らした。

平民出身だという男が相応の礼儀を見せているのに、私の方が露骨に観察するような礼義の欠ける真似をしていた事に対する恥じらいだ。

これでは返って悪印象を与えかねない。

……まあ、睨み返すヴァニングスや、心底楽しそうな王女様に比べれば、私の対応はまだ礼を逸してなかったと思うが。

そして、そんな勇者の視線に気付いているのかいないのか。

王がやはりおどとした様子で、勇者を改めて会食に誘っている。

「えーとだね、勇者殿達。とりあえず、座ってくれると嬉しいかな。彼らはうちの国の重鎮なんだけど、食べながら紹介するから。あ、えーと……それとも、空腹じゃないとか？ 味は保証するんだけど

なんとなく気持ちは分かる。

彼らの前後の会話から察するに、恥であろう事柄を笑い話にされて、しかし聞いた相手がくすりと笑わなかったのだ。

その遣る瀬無さたるや、想像するに難くない。

しかしそんな私の同情など露知らず、会食の始まりと同時に口を開いたのは王女様だ。

「それじゃ勇者殿。自己紹介と行きましようか？」

自身の前に取り分けられたサラダにフォークを刺しながらの言葉。『行儀が悪い』と小声で注意したが、聞こえているのかいないのか。

嬉々とした様子で王女様は自らの名を告げる。

「私はリゼル・フォン・クロスフォード。この国の王女様って事になるわね」

「王女。……王女？ ……王女オ！！？」

「ええ。大変不本意ですが」

本当に不本意である。

相手が友好的だから良いが、王女様はこの会談の重要性を分かっているのだろうか。

本気で驚いた様子の魔術師風の男に重ねて同情する。

皆、最初は驚くのだ。王と王女様は、確かに彼が驚く程に似ていない。むしろ、王女様は亡き王妃様やそこに居る王ではなく、王の母君の肖像画に良く似ていらっしやる。

そして呆然とする魔術師風の勇者に対し、王女様は楽しげに笑って言葉を続ける。

「へえ、やっぱり勇者殿でも驚くんた。まあ、私と父上は本当に似

てないからね。無理も無いけど」

「王女様、そのような趣味の悪い脅かし方は相手を選んで下さい。相手は勇者殿ですよ」

「そうね。……ふふっ、悪い癖だったわ。申し訳ありません、勇者殿。脅かしてしまいましたか？」

流石にそろそろ気が気でない私の忠言を受け入れて下さったのか。まだ楽しそうな様子ではあったものの、王女様は彼へ謝罪の言葉を投げかける。

しかしそれに対する彼の対応に、私を含めた王国側は驚く事になる。

彼は王女様に向けて、深く頭を下げたのだ。

「驚きましたが、こちらこそ謝罪すべき場面ですよ。大仰に驚いてしまい、申し訳ありませんでした。王様にも王女殿にも、同席の皆様にもお詫び申し上げます」

「……いえ、お構いなく」

これには珍しく、王女様も驚きを隠せないでいた。いや、私も驚愕が顔に出ているだろう。

現状の立場を考えるに、彼らはもつと強く出られる筈なのだ。

金銭か、地位か、最悪の場合、その……女とか。

武力を背景にそれを求められる立場に気付いているのだろうか。

勇者に関してはその実力も、そして彼らが必ずしも八王国に心服していない存在である事も、これまでの歴史が証明している。

故に勇者は魔王討伐後に元の世界に送還されるというシステムは、八王国側にとって非常に理に適った物だったと言える。

だがそれが崩壊した今、自分達の立場の強さを彼らは分かっているのだろうか。

「改めまして、名乗りが遅れました。王女殿に先に名乗らせてしまった事、まずはお詫び申し上げます。私は工藤信弥……この国風に名乗りますと、シンヤ・クドウとなりますね。こちらはクロウ・カシマです。以後、お見知りおきをお願い致します」

丁寧に礼をしながら言われた言葉に、高圧的な態度は見えない。額面通りの態度と受け取るのは危険だが、少なくとも向こうは礼儀正しく……というより、立場を考えると破格の腰の低さを以て名乗って見せた。

となると、私達が名乗らなければこちらが非礼だ。

「……ケイト・エルヴァンシアです。財務官を務めております」

「……ヴァニングス・クロイツだ。騎士団長をしている」

「オーギュスト・クレイム。宰相」

ヴァニングスがどこか拍子抜けしたような表情で名乗り、続いてオーギュスト様が淡々と名乗る。

……頼むから敬語程度は使ってくれと思う私を責められる人は、誰も居るまい。

脳筋が脳筋なのは百歩譲って仕方ないとして、オーギュスト様の誰に対しても変わらない淡々とした態度は頼むから時と場合を選んで欲しい。

これさえ無ければ、彼はその執務能力を以てして、八王国最大の国家であるエーレンベルク王国の重鎮であり続けた筈なのだ。

いや、その場合オーギュスト様ほどの才人をうちの国が手に入れるのは不可能だったので、これに関しては良かったと言えるのだろうか。

……そんな風に、思考が横道に逸れたのがいけなかったのだろう。

「ご丁寧ありがとうございます。それでは、皆様に一つお聞きしたいのですが」

名乗り返した私達に対して、魔術師風の勇者——シンヤ殿がもう一度丁寧に礼をして、訪ねて来たのだ。

「皆様は私達をどのように処したいとお考えですか？」

完全に機先を制された。

この会食を機にして、徐々に様子を見ながら詰めて行くつもりだった今後最大の懸念を、彼は正面から投げかけて来たのだ。会話の主導権を完全に握られた。

度し難い失敗に、頬が引き攣るのを隠し切れない。

王女様はきよとした表情で、シンヤ殿とクロウ殿へ視線を向けている。

私は動揺を出来る限り顔に出さないようにするので精一杯。横のヴァニングスが額縁を付ければ『愕然』という題名の絵画として提出できそうな顔をしているので、どれだけ意味があるかは謎だ。

オーギュスト様は動揺を顔には出していないが、僅かに身じろぎしたのが見えた。

シンヤ殿は私達を順に見回すが、これから詰めて行くつもりだった問題だ。この場で有効な回答を持っている者は居ない。

しかし文武のトップが揃ってこの有様では不味い。

これまでは折角友好的に進んでいたのに、この問題に対する回答で不信感を抱かれては元も子も無いのだ。

何か言わねばと思考するが、頭の中で言葉と理論が空転するのみ。相手が納得しそうで、尚且つこちらで実現可能な対応は、すぐには出てこない。

私が、そしてオーギュスト様が思考を回転させるも答えは出ない。
ヴァニングスは……馬鹿の考え休むに似たりだ。特に期待はしていない。

王女様はきよとした表情から、面白がるような表情へ復帰した所だ。

この件が終わっても私の首が繋がっていたら、泣くまで説教してやろうと内心で泣きながら決める。

しかし、そこで横合いから声が飛ぶ。

円卓に、勇者達と向かい合うように座る位置から。

——王の声だ。

「……それがさ、その……私達も困ってるんだよね。君達との関係をどうすれば良いか」

余りにも赤裸々過ぎて泣きなくなるような王の言葉。

あわや最悪の事態になるかと、もう本気で恥も外聞も投げ捨てて泣いてやろうかと自棄っぱちで思い始めた私の耳に飛び込んで来たのは、どこか納得の響きを持ったシンヤ殿の声だ。

「成程。決めかねているからこそその昨日今日の対応だったのですね。納得しました」

半泣きになりかけている目で慌ててそちらを見ると、嫌味を言った様子にも見えない。

シンヤ殿は心底納得した様子で頷いていた。

「では、話しあいましょう。私達も貴方達との関係をどうすれば良いのか分かりかねています。出来れば友好的にお願いしたいのです」

が」

苦笑交じりにそう言われた言葉に、今度は私は安堵の為に泣きたくなった。

彼らも私達との付き合い方を模索している最中だったのか。それに加えて、少なくとも彼らは友好的な対話を求めている。

どうやら首は繋がったままで済みそうだ。

王女様への泣くまで説教も、実行できそうである。

第四話：情報と状況と確認と（前書き）

まだまだ説明、状況確認の回が続きます。

それと、タグを若干整理しました。

最強系の要素も、改めて確認したらある……かも？

第四話：情報と状況と確認と

どうやら向こうも俺達との距離を測りかねていたらしい。

『勇者』が『危険物』とほぼイコールで結ばれているという予想が概ね正解だったせいだ。

その後の会話は最初に比べれば幾分警戒も薄れ、和やかになったと言つて差し支えないだろう。

基本的に食う専門でろくに会話に参加していなかった九郎は放置。こいつはアルヴアトロス時代から対外折衝を俺に任せがちな所があった。

ともあれその結果、こちらが欲しかったこの世界の状況と、俺達の立場に対する情報はある程度仕入れる事が出来た。

先方も、俺達がある程度話が通じると見たのだろう。

ある程度の情報を流した方が、こちらで理性的判断が出来るとの判断と思われる。

無論一から十まで鵜呑みにする無いが、貴重な情報である。何せ俺達はこの世界と今の状況に対して、全くの無知に近いのだから。

そして、得た情報を大雑把に纏めると以下のようになる。

『勇者に関して』

- ・勇者は八つの王国にそれぞれ召喚される。
- ・その人数は各国に一人から三人程度。それはこれまで歴代の召喚での経験則。

・勇者は強力な力を持って呼ばれる。ただし、王に従う理由はないので、各国の王はどうやって勇者を魔王退治に行かせるか苦慮する。

その為勇者召喚は最後の手段の筈である。

・しかし、今回は『犠牲が大きくなる前に抜本的対処を』という意見に押されて、魔王に討伐軍を送る前に勇者召喚の儀を行った。
・そしたら、勇者召喚の前に斥候として送っていた部隊が魔王を倒してしまった。

・魔王を倒した際に流れ出る魔力で送還するつもりだったので、魔王がすっかり倒されてしまった今、送還手段のアテは無い。

『この世界に関して』

・地名や国名などは、基本的にアルヴァトロスの世界と重ならない。
・アルヴァトロスには『魔王』関係のクエスト・イベント・情報などは無かった。

・その割に貨幣単位、モンスターやアイテムなどに関する固有名詞・情報はほぼ完全に同一。

・でもレベルやステータスの概念は無い。

・推測するに、アルヴァトロスの世界に良く似た平行世界とでも言う所か。或いは歴史が俺達がプレイしていた時代とは数百数千年単位で前後している可能性がある。

『魔王に関して』

・魔王はモンスターの軍勢を率いて人族の領域を脅かす存在に対する呼称。数百年に一度の周期でモンスターの中に生まれ、これまでに六度勇者の手で討伐されて、一回だけ（＝今回）斥候隊の手で討伐された。

・先方の意図などは不明。確かなのは魔王が在位している間は、モンスターの動きが活発化し、人族の領地である八王国が度々脅かされて来たという事。

・数十年ほど前に生まれた此度の魔王は積極的にこちらに攻めて来る事は無かったが、活発化したモンスターの不気味にも動きや動きを見せない魔王やらに、各国は合同で対処していた。

・ケイト女史曰く、『今回の魔王は歴代最弱だった為動かなかった可能性あり』。要検討。

『八王国に関して』

・神代から続く八つの王国。ただし、クーデターによって別の家系が王家になり代わったり、別の国家が実質的に他の国を支配している時期もあったりするので、この態勢が今までずっと守られて来たわけではない。重要なのは勇者召喚の巨大魔法陣の要となる、八王国の王城の位置。

・ここは八王国最弱のクロスフォード王国。魔王が出て来るまでは、隣国であるエルネイシア王国に攻められて実質的な従属状態を強いられていた。

・魔王の為にその従属状態からは解放された。

……こんな所か。

三行でまとめると、

『アルヴァトロスに良く似た世界。』

定期的に魔王が沸き、その魔王を倒さないと帰れない。

ここは最弱の王国クロスフォードです』

こんな感じである。とりあえず九郎にはこう言っておけば大体納得してくれるだろう。

そして、まあ。勇者であるらしき俺達を、ケイト女史やヴァニングス殿といった王国側が恐れる理由も分かった。

『王家に従わない可能性のある強大な戦力』という立場の俺達に對して、『うっかり呼んだけれど帰せません』という最大級の無礼をブチ撒けたのだ。俺が逆の立場ならば、それはもう戦々恐々とも

なろうというものだ。

まあ正直腹が立たんでもないし、折角決まっていた就職先とかどうなるんだろうなーという懸念もある。

しかしこつも恐縮されると、責めたり怒鳴り散らす気にもならん。そうしたところで何の解決にもならないし、気が滅入るだけだろう。幸いにして、俺には出来た兄と弟がいた。実家はそちらに任せても、まあ上手くやってくれるだろう。

一先ず残して来た家族や友人に関しては、そこで折り合いを付けるとする。考えても仕方ないのならば、非建設的な思考はしない主義だ。

「……事情はある程度は分かりました」

ひとしきり聞きたい事を聞いた俺の言葉に、主に説明役を務めてくれたケイト女史の身体がビクリと震える。

年上らしき女性にそんな露骨に怯えた反応をされる方が、正直言っただけなのだが。

ともあれ、気を取り直して咳払いを一つ。

今度はこちらが懸念と情報を伝える立場だ。

向こうが相応の誠意を持って情報を話してくれた以上、こちらも話さねば信頼関係は成り立つまい。

「こちらが保有する情報をお伝えします。

まず第一に、私と九郎は召喚される前はさして力の無い普通の平民であった事。……あ、いや、訂正。九郎は多少違いますが。

第二に、召喚された事によって身についた戦う力とやらに心当たりはありますが、それがどの程度使えるのかまでが判然としません。私達がどの程度の強さなのかも、判然としないという事です。

そして第三に、私達は貴方達の負い目や私達自身の武力を背景に

過剰な要求をするつもりはありません。……当座の衣食住程度は要求させて頂きますか」

ひとしきり喋り終わって、円卓の上に置かれた水差しから木製のコップに水を注ぎ、飲む。

どういう理屈なのか良く冷えた水に僅かな驚きを顔に出している俺だが、ちらりと見た所による王国側の反応もまた驚きだ。こちらは『僅か』ではないが。

最も露骨に驚きを顔に出しているのがケイト女史。

オーギュスト殿は探るような視線をこちらに向けて来ている。要求が過少と見たか。まあ、無理もない。

ヴァニングス殿に至っては、完全に猜疑心の籠った目でこちらを見ている。これもまあ、無理もない。

要は自分の立場と力（推定）を理解して尚、こちらがへりくだった態度に出るのが予想外だったのだろう。

しかし俺からすればこれは当然の事だ。

帰る手段を探すにしろこの地に暫し定住するにしろ、敵を増やして良い事はない。

仮に武力を以て彼らを脅かして豪華な生活を得れたとしても、その豪華さに酔えるような性質の人間ではないつもりだ。多少質素でも、友好的に得た生活の方が安心感がある。

争いによる支配よりは、迎合して調和しようと考えてしまうのは日本人の国民性か。

まあ、自分自身がそれを嫌いではないので良しとする。

「……クロウ殿はそれで宜しいのか？」

オーギュスト殿が俺ではなく九郎を見て発言する。

交渉役として矢面に立っている俺ではなく、その横で何も言わずに飯を食っている九郎の反応を見るつもりか。

しかし九郎はパンを千切りながら、肩を竦めて苦笑する。

「こういう交渉に関しては、俺よりも信弥の方が向いているのでな。俺としてはこいつが決めた結果であれば異論は無い」

「……左様で」

出方を見るつもりだったようだが、こいつは完全に面倒事を俺に押し付ける気だ。

残念ながら、交渉の場に連れて来た時点で思考と発言を放棄しているだろう。

こいつに意見を聞くくらいならば、その辺で連れて来た近所の子供に意見を聞いた方が建設的だ。

賭けても良いが、こいつは俺とケイト女史の情報交換の話が長くなつて来た辺りで話を聞くのを諦めている。

そして俺達の話聞いて、安堵した様子でにこにこ笑っているのは王様だ。

「そうだねえ……勇者殿達がそれで満足してくれるなら、私達も嬉しいかなあ。……や、えーと、ほら。うちってさあ、貧乏な国だから……あんまり要求されても出せる物が無いし、かと言って武力で脅されても困るし……」

「……陛下は些か正直過ぎです」

赤裸々に語る王様に、疲れたようなケイト女史の声。

善人なのは分かるが、裏表が無さ過ぎて心配になる王様だ。ともあれ、これでお互いの立場はある程度表明したわけだ。後は

実務的な話になるだろう。

冷たい水で喉を潤した俺は、友好的な笑顔を浮かべて場を和ますための冗談を口に出す。

「まあ、私自身が貧乏臭い物でして。先程九郎に言われた通り、安物のワインを最高級品だと勘違いして論評したと言う恥ずかしい過去もありますし」

「ふふっ、だったら父上と気が合うかもしれないわね。父上も私が悪戯で出した蛙の肉のソテーを鶏肉のソテーだと思って美味しく食べていたし」

「えっ」

「えっ」

「えっ」

和ますための冗談だったのだが、直後に王女様が投げ込んだ爆弾発言によって、場が和むどころか凍りついた。

俺、ケイト女史、王様が異口同音に短い驚きの声を上げる。

ヴァニングス殿は言葉も無いようで固まっているし、オーギウスト殿は呆れたような溜息。

「あら、父上。馬鹿にしたものじゃないわよ？ 蛙って、戦場では捕まえて非常食にする事もあるんだもの」

「……それは糧食が尽きた場合の非常手段です、リゼル様」

辛うじて軍部の代表であるヴァニングスが絞り出すように言った声に対して、王女様はこころと笑って返す。

「結構美味しいのよ、あれ」

「そんな事、他の場では絶対に言わないで下さい……」

「戦場の兵士達が粗食に我慢しているのに、王城の私達がそれより

良い物を食べているのは気が咎めるわ。ねえ、父上？」

「あー……うん、そう言われると確かにそんな気も……」

「我が軍の補給はしっかりしています。そんな物は今時どの部隊も食べません！！」

必死になつて叫ぶ騎士団長に、ころころ笑つていなす王女様。

随分と庶民派というかお転婆というか悪戯好きと言つか。

そして啞然とする俺やケイト女史を横に、同調の声と共に頷く男が一人。

九郎だ。

「こちらの世界にも蛙があるのか。では王女、ザリガニは食べた事があるか？」

「ザリガニ？　なにそれ、美味しいの？」

「いや、然程美味くは無いが非常時の糧食として最後の手段に――」

「はいストップ！　お前ら変な所で意気投合しないで頂けますか！？」

「王女様、お願いですからもう少し慎みを持って下さい！！」

異世界合同、戦場非常時用緊急糧食会談に入ろうとしていた馬鹿、そして馬鹿。

ほぼ同時に止める声を出した俺とケイト女史は、互いに疲れた視線を交わす。

（……貴方でも大変ですね）

（……いえ、そちらこそ）

何だかよく分からないが、通じ合えた気がした。

とにかくこのまま、この二人に会話を続けさせては不味い。主に

お互いの世界の名誉の為。

目線だけの会話でその線での合意に至った俺達は、互いに頷いて言葉を発する。

「とにかく皆様方、勇者殿達は自分達の立場を話し合いによって解決したいと考えておられます。まずはこの会談で、彼らの当座の立場を決めてしましましょう」

「ええ、そうしてくれると私達もありがたいです。住居に関しては、今の部屋をお貸し頂ければ幸いです。食事はどうしましょうか？」

「朝昼夕と、王城の主だったメンバーは可能ならばここに集まって食べるのが習わしです。ここで食べるか、もしくはお部屋にお持ち致しますか？」

「いえ、私達もまだこの世界について知らない点が多すぎますので、皆様の食事に同席させて頂ければ学べる事もあるでしょう」

「では、その線に進めましょう。衣服に関しては、今日中に幾つか見繕ってお渡し致します」

「助かります」

とにかく先程の会話を続けさせてはいけない。

その目的の一致からか、俺とケイト女史の話し合いは極めて順調に進んだ。

ズバズバと話を進めて行く俺とケイト女史を、オーギュスト殿が呆れた目で見えていたのは気にしない事にしようと思う。

誰だって、身内の恥は晒したくないのだ。

当座、その場で決めたのは俺達に与えられる衣食住。

そして未だ自分達の実力を正確に把握しきれていない俺達が、その能力を把握する為の訓練場の貸与。

それ以降に何かあれば、ケイト女史かオーギュスト殿といった文官に相談する事といった方向性で話は纏まった。

余談だが、決める事を全部決め終わってからやっと食事を開始した俺とケイト女史だが、その頃にはサラダは微妙に萎びており、パンは表面の水分が抜けて硬くなつてきて、スープは冷め切つていた。味としては現代日本に遜色無いのだが、味気無い食事だと思つた俺を責められる者は誰も居まい。

そして昼。

訓練場とは名ばかりの、城の近郊にある平原だ。本当にこの国の財政が本気で心配になる。

監視しておきたいと言う気持ちは分からなくもないが、はっきり言う。魔術やスキルの発動失敗を見られたら、俺は恥ずかしくて死ぬ。

例えば魔術師系が基礎クラスである『術使い』で覚える基本魔術の一つ、ファイアボールの場合は目標に向けて手をかざした上で『

ファイアボール』と声を出すのが発動条件である。

戦闘状態以外では発動しないように、動作と魔術名・スキル名の両方が揃わないと発動しない仕様だったのだが……。

考えてもみて欲しい。仮にこの世界で、発動条件がアルヴァトロスと違った場合、もしくはそもそも魔術やスキルが使えなかった場合の俺達の行動を。

『ファイアボール！』とか威勢良く叫びながら、伸ばした手の先からは何も出ない。

事情を知っている九郎相手ならまだしも、事情を知らない第三者に見られた日には俺は死ぬ。死因はきつと『自己嫌悪』とかその辺だろう。

良い大人にもなつて、かめはめ波の練習をしている姿を第三者に見られる所を想像して欲しい。俺の気持ちを分かって貰える筈だ。

そんなわけで、第三者の介在を嫌った俺達。

もしかしたら遠くから監視程度はされているのかも知れないが、詳細が知れなければ言い訳は利くので、そこまでは意識的に気にしない事にする。

発動に失敗した上に詳細まで知れていたら、潔く死のう。自己嫌悪で。

「——さて、それでは始めるか」

「良いね、お前は気楽で……」

ある意味決死の覚悟な俺の内心を知ってか知らずか。

いや、確実に知らないであろう九郎は、堂に入った動作で腰に差した長刀を抜く。

銘刀“獅子王”。500Lvのカンスト組の戦士系職業が使った武器としては一段劣る装備であり、付いている付与効果は単純明快な

速度上昇と威力上昇のみ。

しかしその単純な効果も、こいつが使うと異様な戦闘力を発揮する。

何を隠そう、こいつは単純な白兵戦で言ってしまうえばアルヴァトロス内屈指の実力の持ち主だ。

プレイ時間やつぎ込む現金によるアイテムブーストが凄いわけではない。むしろそういった面で言えば、こいつは上位一割の500Lvプレイヤーの中では確実に下位に当たる。

普通のMMOではなくVR……ヴァーチャルリアリティーだからこそ強い、一種の変則型だ。

或いはきつと、戦国時代辺りに生れていれば名を残していたであろう人材と言えば良いか。

実家が剣術道場であり、祖父や曾祖父が安土桃山時代から続く実践剣術を修めた無形文化財。そして、九郎自身がいずれその道場を継ぐべく幼い頃から剣術一辺倒の人生を送って来たという、二十二世紀に生れて来たのが間違いだったような経歴の持ち主だ。

……ここまで言えば、ある程度想像も付いただろう。

単純なステータスでも、アイテムでも、データ的な特殊能力でもない。

こいつは“プレイヤー自身が持った”戦闘能力をヴァーチャルリアリティーの世界で運用していた、一種の変則型だ。

アルヴァトロスの世界において、魔法はともかく近接戦での体捌きなどは割と個人の技能に委ねられる部分が多かった。装備やステータスやスキルで体力や速度、実際に攻撃が当たった場合の威力や防御力の補正はされても、実際に当てたり避けたりに必要な技術的な『巧さ』の面はプレイヤースキル任せだったと言うわけだ。

その結果、以前アルヴァトロスの運営が世界規模で行った大会においては珍妙不可思議な事態が起こったのである。プレイヤー同士のトーナメントバトルによって、最強のプレイヤーを決めると言うお題目で行われた大会であった。

後衛職のトーナメントはやはり廃人と呼ばれるような、アルヴァトロスに人生の全てを捧げたような連中の独壇場だったのだが、前衛同士のはその、何と言うか。

まあ、ベスト4の陣容を説明すれば納得いただけるだろう。

大陸よりの刺客として、中国拳法の若き師範が。

ヨーロッパからはオリンピック出場寸前まで行った事があるらしき、フェンシングの達人。

太平洋を挟んだ新大陸からは、海兵隊の白兵教官。

そして日本からは祖父に無形文化財の剣術師範を持つ剣術馬鹿、

鹿島九郎。

ご覧の有様である。レベルや装備、プレイ時間においては廃人達に一步譲るも、『お前らこれゲームの大会です。天下一武道会は他所でやって下さい』と言いたくなるような陣容だ。

装備の質やステータスによって基礎スペックでは上回っている相手を、“武”の技量によって下して来た猛者達だった。

ちなみに九郎はそこでは総合三位。準決勝で九郎を下した海兵隊教官が一位だったので、九郎自身が二位の中国拳法の師範と戦っていたらどうなっていたかは未知数である。

つまり、まあ。

九郎はアルヴァトロスという世界において、公式大会で白兵戦部門世界第三位という成績を残している変態的な白兵技量の持ち主だ。そういった意味でも、召喚されて来た中でこの男が一緒というのは心強い。

荒事となれば技量的にも精神的にも、ゲーム内でこいつよりも優れている者はそうは居ないだろう。

そんな俺の内心を他所に、堂に入った動きで正眼に刀を構える九郎。

にい、と口の端に笑みを浮かべる。ゲームの中ではなく、自分の身体でゲーム内の力が振るえるのが楽しみなのだろう。

そして正眼の構えから、流れるように刀を振り上げ、

「————『ソニックブレイド』ッ!」

振り下ろしながら、裂帛の気合と共に技を叫ぶ。

九郎のクラスである剣士系最上位職、【剣豪】が使える数少ない遠隔攻撃スキルだ。

剣の振りに合わせて生み出される真空の刃が、遠距離にまで届いて敵にダメージを与える——のだが。

「……おおおおおお!」

眼前で起きた、ある意味予想通りだが想像を越える事象に、俺は思わず呆然とした声を上げた。

ゲーム内のエフェクトではレベルの向上に従って大きくなる真空の刃。九郎のレベルならば、身の丈に数倍する大きさだ。

それが九郎の眼前から数十mに渡って盛大に大地を抉りながら前進し、轟音と共に消えたのだ。

ゲームの中ならば、そうではない。少なくとも敵対するモンスターやキャラクター以外には何の破壊ももたらさない便利な技であった。

正確に言うならばソニックブレイドに限らず、俺の使える魔術ま

で含めて、攻撃スキルというものは得ててそう言う物だった。

恐らく味方や……ましてや、地面や木々などの構造物にまでダメージを与えるような複雑な処理を、製作側が嫌ったためだろう。

しかし眼前には深く抉れた大地。間違っても、ゲーム内で見ていた効果とは別物だ。敵にダメージを与えるだけだった筈のスキルが、大地を盛大に抉る局地災害となっていた。

対する九郎も、珍しく——本当に珍しく、自身の引き起こした結果を見ながら驚いた表情を浮かべている。

「……どう思う？」

「俺に聞くなよ」

九郎が困惑気味に上げた声に、俺は投げ遣りに返すしかない。

発動した事を考えるに『かめはめ波をやるうとして何も出なかった』というような事態は回避されたようだが、代わりに『かめはめ波をやるうとしたら元氣玉が出た』とでもいうような事態に遭遇する羽目になったのだ。

この結果を想定していなかった俺が馬鹿と言えば馬鹿なのだが、それを言っても仕方が無い。

何がどうなっているのかは、これから検討するべきだろう。

「どうやらゲームの世界そのままと考える方が良いな。俺もお前も、本腰入れて何が出来て何が出来ないのかを検討しておく必要がある」

「……同感だ。これを味方のいる場所に撃ち込んだ結果など、想像もしたくない」

ゲームの世界に似ているが、ゲームの世界ではない。

俺達は改めて、その事を脳裏に刻み込む。

それが分かっただけでも、大きな収穫だったと言えるだろう。

その後は互いに幾つかのスキル、魔術の発動とその効果を確認める作業が続いた。

分かった事は、『自分達の能力などは、やはりステータス画面に表示される能力に相当している模様』という事。そして、『スキルも魔術も一通り使えるようだが、アルヴァトロスの世界と違って、対象以外にも被害を与える代物に成り果てている』という事か。

前者は少なくとも元の自分よりも高いスペックの身体になっているので文句は無いが、後者はかなりの大問題だ。ゲーム内の能力を現実で使えばこうなる、と言われてしまえばそれまでだが。

しかし成程、王国側が俺達を恐れるわけである。

『勇者』とは名ばかり。実質的に、俺達は戦闘兵器として呼び出されたのだと、改めて実感した。

第五話：重鎮達の会話と“戦姫”の思惑（前書き）

幾つか試行錯誤した結果、主人公（信弥）の立場から見ると一人称視点と今回のような三人称視点の二つの使い分けで行く事にします。第三話のケイトさん視点は……例外と言う事でお願いします（´・ω・`）

第五話：重鎮達の会話と“戦姫”の思惑

■ Side 王国側 ■

彼ら——王国側にとって、最悪の事態は回避されたと言って差し支えないだろう。

召喚された『勇者』は二人ともまだ若者であったが、最低限の道理は弁えている様子だった。

騎士団長であるヴァニングスに至っては、王に何かあれば刺し違えてでも仕留める覚悟だったのだが……良い意味で肩透かしを食らった状況だ。

そして今、王国の文武を司る三名は、宰相であるオーギュストの執務室に集まっていた。

全体として過度に質素な王城の中にある、粗末な机の上に大量の書類が積まれただけの部屋だ。他の部屋とどう違うのかと言われれば、置いてある書類くらいしか違いが無い。

オーギュスト自身が華美を嫌う性質なのと、根本的に金が無いのが原因だろう。

椅子すら部屋の主の分しか無い為、残りの二名は机の前に立っている格好だ。

「やはり某の睨みが効いたようだったな。彼奴ら、随分と大人しかったぞ」

「黙って下さいますか脳筋」

そして開口一番、満足げに呟かれたヴァニングスの言葉をケイトが斬って捨てる。

彼女からしてみれば、『無闇に挑発するな』と幾度と無く言い含

めた筈なのに、全力でガンを飛ばしていた目の前の脳筋騎士団長は頭痛の種だ。

しかしヴァニングスは豪快にその言葉を笑い飛ばす。

「相手に武力があれど、屈さぬ心根こそが重要なのだよ。某の睨みにあつては、どんな荒くれもたちまちに大人しくなると、兵達の間では専らの評判である。彼奴らも怯えたに違いない。げに恐ろしきは某の眼力だ」

「……オーギュスト様、この馬鹿をどうかして下さい」

「断る。忙しい」

「暇だつたら良いのですかな。……しかし真面目な話、舐められっ放しは良くないのも事実だと思うのですがな」

肩を軽く竦めながらのヴァニングスの言葉に、オーギュストが頷きで応える。

それに首を傾げたのはケイトだ。

「分からなくもありませんが……彼らはそのような真似をせずとも話を通じる相手に見えました」

「この状況でそこまで理性的に振る舞える事も含めて、私には彼らがただの平民とは思えない」

「……それは、確かに」

「ですな。某も同感です」

かつては八王国の中でも最大の国家である、エーレンベルク王国にて重鎮を務めたオーギュスト。

誰に対しても敬うでもなく淡々とした反応しか返さない性格であるが故、上位者の不興を買って罷免されたが……その執務能力と経験に関しては、ケイトもヴァニングスも全面的な信頼を向けている。その彼が言った言葉であるが故に、それは一定の説得力を持って

ケイトとヴァニングスに受け入れられた。

そして、自説を受け入れられた事を確認したオーギュストが頷き、重ねて呟く。

「あの魔術師。冷静で理知的だが、故にこそ疑問だ。奴は本当にただの平民なのか？」

その呟きに、ケイトとヴァニングスが思考に沈む。

『勇者』というのは、この世界においては魔王に次ぐ危険因子だ。幾ら警戒し過ぎてもし過ぎる事は無い。

或いは平民だと言うのが偽装であり、何らかの目的を持っている可能性もある。

王国側が持っているその疑問は、『立場的な意味』では間違いで、『能力的な意味』では正解だと言える。

そもそも中世ファンタジー世界の人間が思い描く『一般市民』と現代社会の『一般市民』には意識レベルや教養レベルで大きな隔たりがあるのは言うまでもあるまい。

特に高校、大学と一定以上のレベルの教育機関を出てさえいれば、中世社会ならば賢者と呼ばれるだけの知識量は持っている事になる。物によってはこの世界には有り得ないチート知識と言える物もあるだろう。

しかし、現代社会ではそれが『普通』である。

立場的な意味で、信弥が『普通の平民』と言った事に嘘は無い。彼自身も、それがここまで王国側の頭を悩ませる原因になるとは考えていなかっただろう。

ちなみに九郎が『普通』でない事は、信弥のみならず現代社会時代の彼らの友人全てが保障するであろう。

少なくとも二十二世紀に現存する数少ない剣術道場の跡取りは、『普通』の範疇には入るまい。

だが、能力面で言えば王国側の懸念通り……九郎は言うに及ばずながら、信弥も普通と言えたかどうかは首を傾げる所だ。

合理的な思考力と冷静な判断力、そしていざという時に見せる悪辣さは、信弥と友人関係にあった人間達が揃って認める、信弥の『普通』ならざる特徴だ。

まあそれでも、生まれる時代を5、600年は間違っていると揶揄される九郎よりは常識的な人間ではあるのだが。

「……考え込んでいても結論は出んか」

暫しの沈黙の後に、溜息と共にオーギュストが小さく呟く。

そしてその視線が向かう先は、騎士団長であるヴァニングスだ。

先の会談の折に、勇者達は訓練場の使用を求めて来た。

自分達の能力を試したいと言っていたが、ヴァニングスの同行は拒否されたと聞く。

——果たしてその意図は何か。

一応ある程度の友好関係は築いたが、こちらに手の内を見せるつもりは無いという事か。

斥候などを使って監視させる事も考えたが、それが見つかった場合のリスクを考えると余り使いたい手ではない。

思考に沈むオーギュストは気付いていない。

単に失敗したら恥ずかしいから連れて行かなかったという、多少の不信感を与える事を許容してでも『第三者にかめはめ波の練習を見られるような気分』を味わう可能性を避けたかった信弥の意図など、気付けという方が無理があった。

……どうにも王国側と勇者側で思考に微妙な齟齬があるのだが、

彼らがその齟齬に気付くのはまだ先になる。

王国側は勇者側を過度に警戒しており、勇者側は警戒されているのが分かっていながらも、それがここまでの物だとは思っていない。なんとも微妙なバランスで成り立っているのが、この状況だ。全てを知った第三者が見たら、笑うだろうか呆れるだろうか。

そしてその微妙なバランスの一角に立つオーギュストは、視線を窓の外に向ける。

窓から見えるのは広い草原。その一角を、騎士団は時々訓練場として使っている。

今現在は勇者達がそこを借りている筈なのだが、距離がある。人の姿が胡麻粒程度に見える程の距離だ。余程の事が無い限りは、ここから見えるような現象は起きないだろう。

——そう、オーギュストが思考した瞬間。

轟と音を立てて、巨大な斬撃が草原の地面を抉った。

人の姿が胡麻粒ほどに見える距離。しかし、明確に斬撃が地面を抉った様子が見えた。

ならば今の攻撃、どれほどの規模の物なのか。

愕然とするオーギュストの視線と、外から聞こえた音に反応したか。

ケイトとヴァニングスも慌てて窓の外を見て、そして絶句する。

この距離からでも分かるような、地面に刻まれた斬撃痕だ。

「……やはり、伝承程度の力はあると言う事か」

『魔王』を倒す為、毒を以て毒を制するというのに近い思想で呼び出される『勇者』。

召喚されて来た彼らは、魔王に対抗出来るような強大な力を持ち、

同刻、王城内部。

王女の部屋と呼ぶには余りに物騒な———大きなそのものは宰相であるオーギュストの部屋と変わらないながらも、壁一面にコレクションである武具が並べられた部屋で、クロスフォード王国王女であるリゼル・フォン・クロスフォードは上機嫌に鼻歌を歌っていた。

ちなみに武具に関しては、国費の一銅貨たりとも動かさずに自分の働きで手に入れたのが自慢だ。

そして彼女の上機嫌の理由は一つ。

『勇者』などという自分を負かしてくれそうな相手が、彼女の目の前に現れた事だ。

「はてさて、伝承では八王国の一つに反旗を翻した勇者一人を討伐する為に、万の軍が必要だったと聞くけれど……実際問題、どうなのかしらね？」

にやにやと笑いながら、腰に差していた愛剣に手を載せる。

その様子をケイトなどが見れば、卒倒するだろうか。或いは泣きながら思い止まるように懇願するか。

つまりは彼女は、試合かそれに類する何らかの手段で『勇者』に挑もう考えているのだ。

彼女は決して愚鈍ではない。

むしろ極めて聡い頭脳の持ち主だと言えるだろう。リスクとリターンを正しく見極める理性と知恵。それを彼女は確実に持っている。問題は、リスクとリターンを見極めて妙手と悪手を判断した上で、時々恣意的に悪手を選ぶその悪癖だ。

彼女は些か聡過ぎたのだろう。

更に言うなれば、強過ぎた。

才に恵まれ過ぎていたと言っても良いし、彼女はそれを伸ばす努力を怠らなかつた。努力し、自らの能力を伸ばして、他の誰かと競い合うのは楽しかった。

魔王復活からこちら、魔物の動きが活発化していた時世だ。

騎士団の皆に剣を教わり、訓練と実戦の中で、すぐに彼らを追い抜いてしまった。

他の部門でもそうだ。魔術においても学問においても、彼女は隔絶した才を発揮して、すぐに他を追い越してしまった。

八王国最弱最小の国家、クロスフォード。そこは彼女の才能を発揮し伸ばすには、余りにも狭い庭だったのだ。

能力を伸ばし、他の誰かと競い合うのは楽しかった。

だが、競い合う相手が居なくなれば？

残念ながら、彼女の中に残ったのは虚無感だった。

更に言うなれば、突出し過ぎた才能は疎まれる。

数日前まで競い合っていた友人達が、急によそよそしくなる事も良くあった。

努力して伸ばした才能が、能力が、彼女に齎したのは虚無感と孤独だけだった。

しかしそれでも、彼女の父である王、或いは姉のような立場だったケイトや、剣を教えてくれた騎士団のヴァニングスは優しかった。そして、お国柄だろうか。民の中にも彼女の才能や能力ではなく、彼女自身を見てくれる人は居た。

それは彼女にとって幸福であり、しかし同時に不幸でもあったと言えよう。

本当に孤立してしまえば、いつそ自由になれたのかもしれない。全てのしがらみを捨てて、どこか別の場所に旅に出るのもありだっただろう。

もつと広い世界であれば、彼女はその才能を存分に発揮し、虚無感に苛まれる事も無く全力を発揮できたのかもしれない。

しかし彼女の聡さと、周囲の優しさがその道を奪ってしまった。彼女は王女という自分の立場を理解していたし、自分が出奔する事で、自分に優しくしてくれた人々がどうなるかを分かっていた。故に小国には過ぎた能力であった彼女の才覚は、彼女自身の為ではなく——魔王によって活発化した魔物から、彼女の周囲の人々を守る為に使われたのだ。

結果として彼女は、“戦姫”などという称号と共に、『当代一の使い手』などとも呼ばれる実力と名声を手に入れた。

しかしそれでも、クロスフォードという庭は彼女にとっては狭すぎた。

常勝無敗の戦姫が求めているのは、自分を存分に負かしてくれる存在だというのに気付いている者は何人いるだろうか。

その些か歪んだ欲求が表に出るのが、自ら悪手を選んでしまう刹那主義的な悪癖だ。

それとて最悪の場合でも自分で責任が取れる範囲で留める辺り、『刹那主義者』と揶揄される彼女は、存外に気配りの人なのかもしれない。彼女自身の自覚は無いだろうか。

今回も先の会談で信弥と九郎の人となりを見て、『仮に怒らせたとしても、自分の単独であれば自分以外の相手に責任追及の矛先を向けるような手合いではあるまい』という判断があったからこそだ。仮に彼らが怒り狂って全国民を殺して回るような手合いであれば、

彼女は確実に自重しただろう。或いは、確実に彼らの命を狩れる時を狙い始めたかもしれない。

まあ、それは仮定の話。

今現在の彼女は、愛剣を片手にどうやって勇者に試合を申し込もうかと、上機嫌に思考を巡らせている。

或いは試合が死合になるか。それもそれで悪くないと、相変わらぬの刹那的な思考に身を委ねながら。

翌日の昼——信弥とケイトが胃を押さえながら見守る事になる九郎とリゼルの試合から、奇しくも丁度24時間前の事だった。

第六話：出来る女……なの？（前書き）

パソコンの問題もあり、エライ間が空きました。申し訳ありません。

「あーもうすっかり忘れられてるだろうなー」と思ってみれば、アクセス数やら感想やらがもっさり増えててリアルで硬直しました。見てくれた皆様、本当にありがとうございます。では続きます。

第六話：出来る女……なのか？

異世界生活も三日目に突入した。

順応性には自信がある俺なので、三日もあれば寝慣れないベッドでも熟睡するのは余裕である。

初日から熟睡していた等と言う意見は聞きたくない。

ともあれ、三日目の朝。

現代日本では味わえなかった清々しい空気を胸一杯に吸い込んで起き上がる。

昨日は出来れば全てのスキル・魔術などを試したかったのだが、対象を任意に選択できない以上、対単体か少数相手の戦闘に特化した九郎の【剣豪】ならともかく、攻撃範囲の広い術師系後衛職の俺の【賢者】は色々不味い。

ゲーム内で見たエフェクトが、そのエフェクトと俺のステータスから想像される威力を過不足無く発揮した場合、地形が変わらないという保証は無いのだ。

試すなら断りを入れた上で、城から離れた場所でやる必要があるだろう。

もうすぐ朝食の時間だろうし、それよりまずは食堂に向かうか。

——そう思考しながら部屋を出て廊下を歩いていたら、書類の山が歩いて来た。

いや、書類の山に見えたのは最初だけで、良く見たら山のような書類を抱えた人間。

更に言うなれば、書類に半ば潰されかけながら歩いているケイト女史だった。

脳内でここ三日で理解した、王城内の位置関係を推測。

彼女の執務室に書類を持って行こうとしているのだと予測を立てるが、それにしたって無茶をするものだ。

どこから持って来たのかは知らないが、明らかに彼女自身の積載限界を突破している。

「……大丈夫ですか？」

「うひゃっ!？」

そして善意から声をかけた俺の行動が、積載限界を突破しつつも根性を総動員して辛うじて均衡を保っていた彼女の運搬行動のバランスを崩す。

俺の事は視界に入ってすらいなかったのだろう。

声をかけたのを切っ掛けに、書類の山が崩れ落ちた。

それも前のめりにではなく、やや後ろに……即ち、ケイト女史本人に向かって書類が雪崩れ込む形だ。

何の行動を起こす暇も無く、書類が崩れる音とケイト女史の悲鳴が朝の廊下に響き渡る。

ちなみに悲鳴は「きゃあ」などという色気のある物ではなく、「ぎゃああ!」というマジ悲鳴だった。

「おゝおゝ……」

「……あの、なんか申し訳ありません」

目の前には書類が崩れ落ちて出来た山。

そして、その山から伸びたすらりとした手足が色気の欠片も無い呻き声をBGMに助けを求めて蠢いている、どーしーもない光景がそこにはあった。

非常にいたたまれない気持ちになった俺は、謝罪しながら書類の

山からケイト女史を発掘する作業に入る事にする。

救出ではなく発掘と表現する辺りで、どのような状態かを僅かなりとも察して欲しい。

食事の後に能力の把握の為の訓練でもするかと思っていた俺の予定は、朝一番からいきなり崩れていた。

「……申し訳ありませんでした」

「いえ、こちらこそ何て言うか大変申し訳なく……」

そして一時間後。

ケイト女史の発掘作業の完了後、散乱した書類を拾い集めて整理し終わった俺は、彼女と並んで廊下を歩いていった。

明らかに積載過剰だった書類は、7割が俺の手の中に。残りの3割はケイト女史が持っている状態だ。

責任感が強いらしいケイト女史、書類を集めるのも運ばせるのも俺に手伝わせるのを嫌がっていたが、流石に俺が声をかけたせいで転んだ相手をそのまま放置して行くのは、勇者だの何だの以前に人としてどうよと思わないでもない。

結局強権発動と言うか、『じゃあ勇者としての権利で手伝わせて下さい』とまで言った結果がこの状況だ。

ちなみに先程から交わされる会話はずっと謝罪合戦。不毛である。流石にこの不毛な会話をいつまでも続けていても仕方ないので、俺は咳払いと共に話題を切り替える事にする。

非建設的な事は嫌いだ。

「……とりあえずこの件に関してはお互い様という事で手打ちにしましょう。いつまでも続けていても不毛です」

「しかし……」

「勇者としての強権を以てお願いします」

「……分かりました」

……しかし『勇者としての権利』を振りかざすのは二回目だが、この権利にしても何かしらの実体があるわけではない。

法律として定められているわけでもないし、要は国側が俺達に暴れられないようにするため、勇者から要求があつた場合はなるべくそれを受け入れるようにしているというだけの要素だ。

余り濫用すべきではないなと意識の端で思考しておく。

まあ、こうでもない限り目の前の頑固な文官は領かなかつただろうが。

「……しかしエライ大量の書類ですね。いつもこれ程の仕事があるのです？」

「平時に比べて倍増しという所です。魔王が討伐された事で、国内外で色々と状況も変わってきてますし」

「そこに加えて『勇者』という爆弾ですか。心中お察しします」

「当の本人に言われるのも妙な気分ですが、ありがとうございます。しかし、シンヤ殿やクロウ殿は理性的なので助かっていますよ」

「……はあ、ありがとうございます」

お世辞だろうか。ケイト女史のそんな言葉に、俺は肯定とも否定とも言えない曖昧な答えを返す。

迷惑をかけている筈の身なのに、逆に礼を言われた事に対する居心地の悪さが最大の物だろう。

その居心地の悪さを誤魔化すように視線を逸らし、今の話の内容

から気になった点を質問する。

「状況が変わって来ると言いますと、魔物の活動と外交関係ですか？」

「……。そうですね、それが大きいです」

「魔物の相手ならば、何かしら手を貸せる事があるかもしれません。何かあれば遠慮無く申し付けて下さい」

「……そう言われましても」

俺の言葉にケイト女史は酷く困ったような表情で、眉間に皺を寄せて考え込んでしまう。

幾らなんでも、魔王亡き今最大級の『爆弾』である勇者をそのような使い方は出来ない、とでも言う所か。

しかし俺としてもいつまでも爆弾扱いされては流石に気疲れするのだが……。まあ、これに関しては今後徐々に改善するしか無いか。そしてケイト女史の最初の回答の前に挟まれた微妙な間と、その際に殊更に取り繕われた無表情も気にならないでもないが……。そこは今、無理に聞くべきではないと判断。思考を破棄する。

そんな感じでどうにも弾まない会話を2、3と繰り返しながら、やって来たのは王城の一角にあるケイト女史の執務室。

俺達に関しては召喚翌日に『困った事があつたら文官に』という事に決まった為、その折に一度場所だけは教えられていた部屋だ。

『文官に言え』と言われても、問題の文官の部屋が分からなければどうしようもないから、との理由である。同様の理由でオーギュスト殿の部屋は知っているものの、他の人達の部屋は知ってはいない。

まあ、知っても何をするというわけでもないし、現状不要な情報なわけなのだが。

ともあれ実際に入るのは初めてな、ケイト女史の執務室。

その扉の前に立った彼女は、書類を抱えているせいで手が使えない為か、器用に肘でドアノブを回し、足で小突くようにしてドアを開けた。

……そして部屋に入ろうとして、慌てたようにこちらを振り向く。その表情を一言で言うならば、『ヤベエやつちまった』だろうか。

「あの、シンヤ殿。私はいつもはもう少し礼儀と常識に則った部屋の入り方をしておりまして、今のはその」

「……ええ、何も見ておりません。何も見ていませんから」

「ちよつと肩が震えていませんか！？ 笑いを堪えていませんか！？ 何で露骨にそつばを向きながら言うのですか！？」

「いやその、それ自体はともかく、後になって慌てて露骨に取り繕つては余計に傷口を広げるだけののような気が……」

「やつぱり見てたと言う事ですよねそれは！？」

……理知的で『出来る女』という雰囲気を全身に纏ったケイト女史のその行動に、思わず笑いそうになった俺は決して悪くはないだろう。

……ないと思いたい。

何にせよ、書類が無ければ両手をバタバタ振り回していそうな慌てぶりを見せるケイト女史を横目に、俺は書類を置く為に部屋に入つて行つた。

構造は俺や九郎が宛がわれている部屋と変わらないだろう。むしろ、部屋の主の性格ゆえか。俺の部屋にあるタペストリーなどの余分な物が取り払われ、殊更に質実剛健、飾り気の無い印象を訪問者に与える部屋だ。

しかし全体に飾り気の無い中、机の上に置かれた兎の意匠が彫られたフアンシーな文鎮と猫の意匠が施された可愛いペンが、こ

の部屋の主の人間性を如実に表している気がしてきた。

一見すると『出来る女』なのだが、意外と隙の多い人なのかもしれない。

「……とにかく、シンヤ殿。ご迷惑をかけて申し訳ありませんでした。今からでも食堂に行けば、朝食を温めて貰えるでしょう」

「ああ、そう言えば……朝食まだでしたっけ」

そして机の上に書類を置き、ケイト女史が咳払いと共にこちらを見ながら告げた言葉に思い出す。

予定が頭っから狂ったので忘れていたが、朝食の時間はとうに過ぎていたように思える。

恐らく既に九郎達は食事を終えている頃だろう。王様などが俺やケイト女史を待つように主張した所で、空腹の九郎が『構わん。食べてしまおう』とでも言い出して押し切るに決まっている。

オーギュスト殿やヴァニングス殿も仕事があるのだ。この場合、九郎の主張は正しいので問題は無い。仕事も何も無い九郎に主張されると、些か腹が立たないでもないが。

「……って、そう言えばケイト殿は食事は？」

「ご覧の通りの書類量ですからね……朝は諦めて、昼に朝昼夕の分を纏めて食べようかと」

「朝食はちゃんと食べないと頭が回らなくなる、とか言っのがこっちだと定説だったんですけどね」

軽く言うが、ケイト女史は肩を竦めて椅子に座ると目の前の書類に挑みかかる。

書類に目を通し、手早くペンを走らせる手際は見事な物だ。朝食抜きによるペナルティなど見えもしない。

猫の意匠が付いた可愛いペンで無ければ、それこそ『出来る

女』の典型図なのだが。

ついでに疑問なのだが、一番『勇者』について腫れ物に触れるが如く扱ってた彼女だが、勇者を放置して書類仕事を開始するのはアリなのだろうか。

その辺り、なんとも微妙にズレている人だ。

まあ、別に腹を立てるような事でも無いのだけど。

「……まあ、とりあえず俺は食堂に行ってきます」
「ええ、それでは」

邪魔をするのも問題なので、とりあえず食堂に向かう事にする。
ケイト女史は立ちあがり一礼してそれを見送って来る。

……別段嘔は吐いていない。

食堂に行くのは事実だ。だが、まあ。

「……サンドイッチやホットドッグって、この世界にもあるのかなあ」

自分の飯の確保も良いが、書類に埋もれている文官殿に軽く食べれる食事を届けてやるうか。

そう思いながら、食堂に向かって歩き始める。

——そして、途中でこの王国の姫であるリゼル殿下と遭遇した。道すがら、すれ違うように歩いてきた彼女は現状唯一『勇者』に對して遠慮や気後れが見えない人物だ。

それ故に彼女がどこか、この世界では変な価値感の持ち主である事は把握しているが、相手は自分達を保護してくれる王国の姫だ。

しかし失礼があつては不味いかと、足を止めて頭を下げつつ壁際

に寄った俺に対して、殿下はわざわざ接近して来た。
それどころか、口の端に笑みを浮かべて楽しそうな目でこちらを
観察して来る。

「うん、やっぱり貴方からはしないわね。『武』の匂いがしたのは、
やっぱりクロウか」

「……はあ？」

「ううん、こつちの話。……クロウはどこに居るか知らない？ 私、
多分彼の方に用があるの」

「『多分』用がある？ ……いやまあ、良いですけど……九郎の馬
鹿なら、食堂に居なければ中庭とか、身体を動かせる場所だと思いますよ」

「そ。ありがと、シンヤ」

それきり、俺から興味を失ったかのように軽い足取りで去ってい
く殿下。

向かう先は恐らく中庭、そこに居なければ俺が言った通り『身体
を動かせそうな場所』を巡るのだろう。

妙な言い回しだったが、殿下は何故か九郎に用があるらしい。

……この時点で気付いて止めていれば、或いは後に胃痛を伴うよ
うなイベントは避けられたのかもしれないが、生憎と俺には未来予
知能力などという便利な物も、将来的な危機を感知する第六感も備
わっていないかった。

感じた違和感にどこか嫌な予感を感じつつも、止めるほど強い理
由でも無かった為に殿下を見送る。

ただ、一方的に妙な質問を浴びせられた意趣返しだろうか。

去り行く殿下に向けて俺の口から出たのは、制止の言葉とは関係
の無い質問だ。

「殿下、こちらからも一つ質問をしても宜しいですか？」

「なに？ 私は今機嫌が良いから、スリーサイズくらいなら答えてあげるわよ」

「要りません。ケイト女史の好きな食べ物って何か知ってます？」

「干した烏賊と安酒。……烏賊、分かるかしら？ そっちの世界にもあった？」

「ありましたか……そうじゃなくて、酒とつまみではなくもつとこ
う、食事的な物で」

俺が脳内でケイト女史に対して初対面で抱いた『出来る女』イメージは、既に瀕死の有様である。

干し烏賊と安酒。あの人はどこのオッサンだ。

思わずシャツとジャージ装備で一升瓶を抱え、スルメを齧っているケイト女史を想像した。

……意外と違和感が無かった事に愕然とする俺に対し、殿下は『
んー？』と首を傾げる。

「……んー……だったらチーズとトマトかしら？ でも勇者殿。女を落とそうと思うなら、プレゼントは食事以外をお薦めするわ。私的には珍しい武器とか。くれたら喜んで、ほっぺにチューくらいはしてあげるわよ？」

「順を追って突っ込みますけど、どういう勘違いをしたんですか殿下。ついでにプレゼントでもありません。更に言うなれば珍しい武器などは持っていないし、ほっぺにチューも要りません」

なんとも突っ込み所満載の言葉を残し、俺の突っ込みに対して力
ラカラ笑いながら、殿下は楽しそうに歩き去って行った。

何とも奇矯な姫君である。

「…… 実際問題、アルヴァトロス時代に集めていた装備類があれば、交渉材料とかに有効だったのかもしれないけど」

その背を見送り、食堂に向かって歩きながら思考する。

アルヴァトロス時代に集めていたアイテムの殆どは、ゲーム内の倉庫に預けたままだ。

ゲーム内では街の倉庫サービスで引き出せたが、引き出す手段が分からない以上はこの世界では当てにしない方が良さだろう。

持っているのは主力装備と、最後にログインした時に持っていた僅かなアイテムのみ。

それらのアイテム類は意識の集中で呼び出せる『スイッチ』から出すステータス画面、そのアイテムボックスに収納されているのは確認済み。

そこで取り出し操作を行えば、手元にそれらが出て来るといった仕組みだ。

俺のボックスに補助アイテムやポジション類しか無かったのは、僥倖なのか不運なのか。それらのこの世界での価値が分かるまでは、一先ずそれらについては伏せておく事にする——というのが、初日の夜に俺と九郎が出した結論だ。

ちなみに九郎のアイテムボックスは昔から単なるガラクタ箱に近い様相を呈しているので期待はしない。

何に使うのか分からないアイテムを溜め込む癖は、光り物を集めるカラスに近い物があるだろう。

いや、奴と一緒にしてはカラスに失礼か。

ともあれ、そんな思考をしながら到着した厨房。

そこで俺は『勇者』に対して怯えるいつぞや俺達を呼びに来た若いメイドや、この城の主任調理師らしき恰幅の良い中年のコックに

対して可能な限り低姿勢に、トマトやチーズを挟んだサンドイッチの材料を分けて貰う事に成功した。

材料を挟むだけの手軽な料理という発想は、実はこの世界には無かったらしい。

サンドイッチについての説明の途中から、勇者への恐怖を忘れて職業意識丸出しで俺の世界の料理について聞いてきたコックを見るに、まず間違い無いだろう。

その結果、ある意味コックとは打ち解けられたのは僥倖か。

勢いに負けて色々話した事もあり、今晚辺りの食事はコックが手掛けた実験作になる可能性が高い。

今後また厨房に来たとしても、今までに比べて友好的な対応が取られるだろう関係が築けたのはありがたい。人間幾ら強くなろうとも、食事が無ければ生きていけないのだ。

ただコックとは馴染めた一方で、メイドがずっと涙目で俺に対して怯えていた事に対しては、俺の方が泣きたくなった。

俺も男である。可愛い女の子に怯えられて良い気分はしない。

折角テンプレ的な感じで異世界に来たのだから、無駄に女の子にモテる感じの特殊能力でも付けてくれれば良かった物を。

それが原因で、俺が脳内にメモしている『神と会った時の殴打予定回数カウント』が+3されたのは内緒であった。

第七話：ゴングが鳴りました

さて、ベーコンレターストマト——所謂BLTサンドの材料＋薄切りのチーズを分けて貰い、それから作ったBLTサンドもどきをケイト女史の部屋に持って行ったのだが。

俺としては予想通り誰も居なくなっていた食堂で一人で食うのも味気ないので、多めに材料を分けて貰ってケイト女史の所で一緒に食う心算だったのだが。

コックのオッサンと協力して作った多めのチーズ入りBLTサンドは、目を輝かせて貪り食うケイト女史の胃に全てが収まる結果となった事をここで明言しておく。

サンドイッチを盛った皿を持って行った後、『俺が使う取り分け用の小皿も必要か』と思つて厨房へもう一往復するまでの間に全てが無くなる早業だった。往復で十分と掛かつていない筈なのだが。

「大変美味しかったです。あれはシンヤ殿の世界の料理なのですか？」

満面の笑みで口元に食べかすを付けながら、俺が食べようと思つていた分まで平らげた小さな大食漢は満足そうに腹をさすっていた。泣く泣く、空の皿を回収して再度食堂へ戻り、そこで再びコックのオッサンに捕まり、実験料理を食べさせられる事になった俺だった。

『何をやってるんだろう俺、そもそも人間とはどこから生まれどこへ行くのか』などと哲学的と見せかけて何も考えていない思考を巡らせながら食べた、トマトソースで味付けされたカツ丼の出来損ないは意外と美味かった。

そしてそのまま成り行きでコックのオッサンに詳しく自分の世界

の料理を教える事になった俺である。

昔読んだ異世界召喚モノの小説では、主人公は普通は先にヒロインにフラグを立てる物なのだろうが、現状俺が立てたのは中年太りのコックのオッサン（聞く所によると45歳、妻子アリ）との料理修業フラグである。

大学生として自活していた為に、ある程度の料理が出来る俺。そして本職ながらも俺の世界の料理についての造詣が一切無いオッサン。

二人は激論を戦わせながら、時にはぶつかり合いながらも、最終的には団結して再現料理の作成に邁進して行ったのだった。

この日の昼前から昼過ぎまでの数時間の俺の行動はこんな感じだった。

『何をやっているんだコイツ』などと思わないでほしい。誰よりもまず、俺が思っている。

ちなみにメイドさんはずっと俺に対してガチ怯えだった。お前は見知らぬ人を見かけた小動物か。

ともあれ不毛なのか建設的なのか分からない、そんな状況は程無くして終わりを告げる。

先程俺の分までBLTサンドを食い尽くしたおめくさいケイト女史が、血相を変えて飛び込んで来たのだ。

「シンヤ殿は居ますか!？」

「あ、サンドイッチイーター」

「さんどいつちいたー……?」

「あ、申し訳ない。目と口が直結してた」

彼女の姿を見た瞬間に思わず口走った単語については、向こうが

よく理解出来なかった様子なので良しとしよう。

食べ物の恨みとは、げに恐ろしい物なのである。

ともあれ見たまを思わず口走ってしまった俺だが、そんな俺の言葉に疑問を抱いたのも一瞬。

ケイト女史は当初の目的を思い出したようで、慌てた様子で俺の元に駆け寄ってきた。

「申し訳ありません！ 責任は全て私が取りますので、急いで来て頂けますね！」

「そこはせめて疑問形にしておいて下さいと思わなくもないんですが……何か問題が？」

「な、中庭で——」

恐らくここまで走って来たのだろう。

荒くなっている息を整える為か、言葉を一旦切った後にケイト女史は大きな声で俺に叫びかけた。

「——中庭で、姫様とクロウ殿が決闘を——」

「責任は全て俺が取りますので急いで現場に行って止めましょう！——」

聞いた瞬間、俺は顔を蒼白にして駆け出していた。

どうやら身体能力的には後衛である俺でも一般人よりは格段に上らしく、かなり後ろから『え、ちょ、待って——！』などというケイト女史の声が聞こえてくるが放置。

それに構えるほどの精神的余裕は無い。流れて行く左右の壁から察するに、この全力疾走は軽く短距離走の世界記録を塗り替えるほどの速度が出ているようだが、それすらも思考の埒外。

何がどうなってそうなったのかは知らないが、俺の脳内ではどうかこの城の面々と築いてきた友好関係が音を立てて崩れ落ちる光

景が幻視されていた。

ちなみにメイドさんはケイト女史が言った状況から惨劇でも幻視したのか、泡を吹いて倒れていたらしい。

俺はその時は気付かなかったのだが、後でコックのオッサンが教えてくれた。

どうやらメイドさんは小動物より肝が小さいらしい。

Side Out

少々時間は遡り、中庭。

鹿島九郎は自身の愛刀である銘刀“獅子王”を手に、ゆったりとした動きで型の確認を行っていた。

殊更に鋭い動きや厳しい鍛錬は、現状では必要無い。

まず必要なのは、車で例えるならば五速や六速による最大速度などではなく、低速ギアによる『慣らし』だというのが九郎の結論だ。

肉体と言うのもまた道具。

繰り返し使う事により自身の肉体の限界性能を把握しておかねば、武術家などはやっていけない。

鍛錬は自らの身体を鍛える事であると同時に、自らの肉体で何が出来て何が出来ないかを把握する為の物でもある、というのが九郎が父祖から教わった言葉である。

その肉体のスペックが、召喚というプロセスを経て大幅に変わった。

ならばその肉体を更に鍛えるよりも、その肉体で何が出来るかの

把握、並びにその身体の運用方法の模索が先決だろう。

そう判断した九郎は、基本的には日課のトレーニングの後はずっと、自分の身体の動かし方の再確認を行っていた。

確かに鍛えてはいたが、現実的な身体スペックであつた現実世界とは違う。

ゲームの中にしか無かつた、現実離れた身体能力がここにあるのだ。

いざという時にイメージ通りに動けないようでは、宝の持ち腐れどころかマイナスになる可能性すらある。

故に自分が最優先でやるべきは自己の能力の把握であり、対外折衝などの面倒事は全て信弥に押し付けても構わない。

信弥に聞かれたら、『勇者』同士での（現実世界から数えて数十度目の）戦争が即時始まってても可笑しくない思考だが、九郎の考えとしてはこのような物だった。

ちなみに戦争と言っても信弥は九郎と正面から戦っても勝てない事は嫌というほど分かっているので、ゲーム内でもゲーム外でも戦闘方法は部屋の漫画を2巻だけ抜いておく（現実世界）やら、装備を買い揃えるのに貸した金の強制返還要求（ゲーム内）といった、ある意味平和な搦め手のみなのでそこまで大事にはならないだろうが。

そして十分ほどかけて一連の型をなぞる動きを、早朝から数十度とこなし終えた所で視線に気付く。

否、正確に言うならば彼は己へ向けられた視線には昼前から気付いていた。

それ自体は特に違和感のある事柄ではない。異世界からの闖入者、『勇者』という名の爆弾だ。監視の目程度はあっても可笑しくはないだろう。

昼前から今までずっと微動だにせずに見ていたその視線以外にも、通りがかりの城務めの者が九郎に視線を向けるのは何度もあった。

気付いたのは、そのずっと見ていた視線の動きの変化。

微動だにせずに見ていた視線の主が、彼の方へ近付いて来た事に気付いた——と言っべきか。

そしてゆったりと、それでいて滑るような無駄の無い動きで九郎の前に姿を現したのは見知った相手だった。

「やつほ。——随分と地道な練習をしているわね、『勇者』さん？」

「そちらも随分と地味な事をしていたな。物陰に隠れて観察か」

「気付いてたんだ。……ま、別段隠そうとしていたわけじゃないけどね」

ガリガリと姬らしくない動作で髪を掻き、気だるそうに応じたのは女性にしてはかなりの長躯に、強気な笑みを浮かべた顔を乗せた姫——リゼル・フォン・クロスフォードだ。

ただし姬らしくもなく、その身に纏うのは動き易さを重視した革製の軽装鎧。どう見ても城内をうろつく格好ではない。

ならば遠出でもするつもりか——などという思考は九郎には無い。

まず先程までは感じなかった、肌に感じる圧力がある。彼が父や祖父と立ち会った時に感じた、所謂殺気に近い物だと九郎は脳内で分析。

そして分析以上に、気だるげに脱力している姫の様子は狩りをする猛獣に近い物だと、理屈ではなく直感しているからだろ。脱力した状態から即座に攻撃に移る、ネコ科の肉食獣に近い。

更には楽しげに笑う姫の手は、腰に差された剣の柄を緩く握って

いる。

理性、直感、そして視覚。三つの要素が今のリゼルの様子を『戦意あり』として九郎に伝えて来る。

故に近付いて来るリゼルに対して、九郎が取る姿勢は攻防どちらでも動きが取り易い半身。“獅子王”は緩く足元に向ける下段の構え。

——殺意の有無はともかく、少なくとも戦意ありと見られる相手に対して隙を見せる程には、鹿島九郎は緩くはない。

少なくとも信弥なら——或いは他の誰かでも、このような場合はまず言葉で止めるだろう。しかし九郎はそれをしない。戦意には戦意で返すのが当然と、理屈よりも本能で決めてしまっている部分がある。

現代日本という社会で育ったにしては異常なこの戦闘的な思考と本質こそ、彼を剣の技量や身体能力以上に『生まれる時代を間違っている』と呼ばしめる最大の要因だろう。

「隠そうとしていないのは、戦意もだろう?」

「——へええ」

そして九郎の言葉と構えに対して、肯定の意を込めてリゼルは笑う。口の端を吊り上げた楽しそうな笑みは、何の事は無くただの本心だ。

『勇者と名付けられても、元の世界ではただの一般人』と、信弥は言う。

事実として、リゼルが見た限りでは信弥からは武芸を齧った者が纏うような雰囲気は見受けられなかった。

術師としてはどうかは知らないが、術師の本領は『後衛』だ。一対一での戦いに向く物ではない。少なくともリゼルのターゲット

としての魅力は半減だ。

対して、九郎は彼女からすれば実に『良い』。

こちらの視線に気付いていた事。戦意を向けられた際の対応。そして鍛錬の様子から察するに、何らかの剣術をそれなり以上の練度で習得している。

それに加えて『勇者』としての能力を持っているとすれば――
彼ならば自分を負かしてくれるのではないか。

そう思うと、胸の奥に狂熱と言っても良いような熱量が湧き上がって来るのを自覚する。

「良いわね、貴方。実に良い」

故に彼女はその熱に逆らわず、感情のままに笑いを浮かべる。

頬を染めて恋焦がれるように浮かべる艶然とした笑みは、しかし肉食獣の威嚇と同等の行為に他ならない。

腰に差した愛剣を引き抜く。刃渡り70cm程度の飾り気の無い両刃の長剣が、使い手の戦意に応じるように紅く光り出す。

奇妙に脱力した低い構えは、鍛錬と実戦を経て作り出した彼女なりの最適解だ。
スタンス

「ねえ、勇者様。貴方強いのか？ 強いんでしょう？ 踊りましょうよ退屈なのよ。こんな強そうな人を前に黙っているとかなえられないわ。疼いちゃう」

「これはまた、随分と情熱的な誘いだな」

「あら、こういう誘いは嫌い？」

「そうは言っていない」

そして応じる九郎もまた、リゼルとは違った意味で常識とズレた感性の持ち主だ。

高揚と狂熱を隠そうともしない戦姫に対して制止の言葉など口の端にも乗せる様子も無く、半身の構えが前傾に移る。

準戦闘態勢から戦闘態勢へ。つまりはこちらも戦意ありという事。

止める意思など欠片も見えない。

常在戦場。相手が誰でそこが何処であろうと、必要ならば戦うまで。

狂熱に踊るリゼルとは真逆。冷め切った伶俐な戦意こそがこの男の本質だ。

しかし気質こそ真逆でありながら、共通しているのはその方向。双方共に戦いを好む本質。それ故に彼らは自らの行いを止めようなどとは考えない。

城勤めの者が数名この異常な雰囲気気付いて騒いでいるのが耳に入るが、両者既にそのような情報は『耳に入っている』だけで、完全に意識から追い出してしまっている。

ちなみにこの時に二人の様子に気付いた城勤めの者がケイトに事態を知らせ、それを聞いたケイトが抑止力を求めて信弥の元に駆け込む事になるのはこの数分後であるのだが——ともあれ。

「——“戦姫”リゼル・フォン・クロスフォード」

「——鹿島九郎。名乗るような二つ名は無い」

最早完全に両者の世界。

申し合わせたように双方が自らの名を名乗る。

続く言葉は完全に同時。

「——参るッ！——」

異口同音の宣誓と同時にリゼルと九郎は颯風の如く弾丸の如く、互いに向けて駆け出した。

長きに渡るクロスフォード王国の歴史上初めての対『勇者』戦。姫君は嬉々として、その戦端を開いてしまったのだ。

第七話・ゴングが鳴りました（後書き）

意見を貰っている友人曰く、『メインキャラクター人格破綻者組』の二名のターンですね。

第八話：戦闘と決着と驚きと

S i d e 信弥

「……………なッ……………!？」

ケイト女史に教えられた現場、即ち中庭への到着と同時に俺の口を衝いて出たのは驚愕と感嘆を足して三で割ったような、意味を為さない単語のみだ。その計算式だと三分の一が足りなくなるのは、つまりは空虚に呆然とするしかないと言う事である。

ここ三日ほどで見知った中庭が崩壊していた。

然程豪勢な場所であつたわけではないが憩いの場所として設置されていたらしいベンチは、何がどうなつたのか原形を留めないレベルまでひしゃげた材木となつて壁際に転がっている。

地面は当然の如く散々に抉れているし、中庭に面する壁が何箇所となく削られている。

庭師などは雇っていないらしく、木々や草花などは無く単なる芝生だったのは幸運だろう。丹精込めて育てた草花をこうまで無残に吹き散らされれば、俺が庭師ならば発狂しかねん。

そしてそんな世紀末状態の中庭の中央近くで、激しい立ち回りを演じているのは見知った二名だ。

片や地を這うような低空を滑るように移動し、縦横無尽に走り回りながら九郎へと斬撃を加えているリゼル殿下。

対する九郎はさほど動かずに、下段に構えた刀での迎撃に徹している。

——速度比べは明らかにリゼル殿下の方が上だ。

ちなみにどうやらゲームのステータスに能力が強化された結果、どのステータス分類に収まるのかも分からん動体視力なんて物も向上しているらしい。常人では視認も困難であろう姫君の動きを俺の目は捉える事に成功していた。

更に言うなれば――

「あは……あはははははっ！　ねえどうしたの遅い遅いそれで終わり？　ああでも何合打ち合ったかしらねこれでも倒れないのね貴方凄いわ……！」

「うわあ……」

地を這う蛇のような軌道で――しかし空を飛ぶ鳥のような速度で駆け回る姫君の、どう見てもアドレナリンの出過ぎてる瞳孔の開いた笑顔までハッキリ見える。

なまじ美人なだけに、むしろ怖い。

対する九郎はやり難そうだ。低空――それも長身の九郎からすれば膝丈程度の高さに収まる超低空を高速で立ち回るリゼル殿下の動きは、九郎からすればかなり苦手な部類の動きだろう。

そもそも剣術・武術という物には『膝丈よりも低い位置に居る敵への攻撃』などという型は酷く少ない。あつたとしても攻撃パターンはかなり限られる。

少なくとも九郎の所の剣術も例外ではないらしく、低空で動く敵はゲーム時代から九郎が比較的苦手だった相手だ。

低空から繰り出される斬撃を“獅子王”で防御する一方で反撃に移る様子は見えない。

「それは光栄だな。しかし何だその動きは。魔物や魔獣との戦いの中だけでも身に付けたか？」

「正解！　魔物も人間もこんなに低い位置からの攻撃は捌き難いら

しくてね！ でも貴方は良く捌くわね、楽しい楽しいでもこんな物じゃないでしょう勇者様！！」

到着してから見ているだけでも数十度。

その回数だけ超低空から繰り出された斬撃を、九郎は悉く防いでいた。

俺から見ればあくまで『見える』だけで、それを防げる捌きが出るかどうか怪しい攻撃だ。

それをこうも防ぐ九郎の技量たるや推して知るべし。しかし俺にとって驚くべきは、ゲーム内の身体スペックとゲーム外での剣術技量を引き継いでいる筈の九郎に対して、ここまで圧倒的に攻勢に出ている姫の存在だ。

「……勇者つてもしかして、意外と弱いんじゃない？」

「そ、んな、事は……ありま、せん」

「うわ」

思わず呟いた俺の言葉に対する返答は、斜め後方の下方向から来た。それもやけに掠れた、途切れ途切れの声で。

見やるとリゼル殿下とは逆に女性にしても背が低いケイト女史が、息を荒げて壁に手を付きながら生まれたての小鹿のように足を震えさせ、手なり顔なり肌が露出している部分からはだらだと汗を流しながら立っていた。

どう見ても走り過ぎであった。

「……生きてますか？」

「なん、とか……」

ぜえはあと息を荒げながら、ずるずると身体を引き摺るようにして——平たく言ってしまうえば些か体調の悪いゾンビのような動

作でケイト女史は俺の横に立つ。

そしてずれた眼鏡を人差し指で直しつつ、彼女は先の言葉の説明を続ける。

「リゼル様は“戦姫”と渾名される、この国の最大戦力です。いえ、それどころか実力としてリゼル様に互する腕前の持ち主など、この世界に五人と居ないでしょう」

「成程、道理で……」

流石にこのレベルの実力者はそうは居ないと言う事か。

いや、目下最大の問題はそれではない。

ケイト女史が俺を呼んだ理由であり目的は、この状況をどうやって止めるかという事なのだが――。

「……どうすれば止まるんだ、これ」

「え？ ……あの、シンヤ殿。割って入れませんか？」

「生憎と白兵戦は専門じゃないもので……」

暴風の如く走り回っている姫君とその攻撃を悉く防いでいる九郎。それは危うい均衡であると同時に、割り込むのを躊躇わせるだけの迫力のある光景であった。

特に楽しそうに笑い声をあげながら駆け回っているリゼル殿下に關しては、下手に割って入れれば割って入った人間を斬り捨てそうなくらいのノリだ。

幾らゲーム内ステータスにより身体能力が強化されているとはいえ、見立てでは俺の能力は速度・反応は辛うじてリゼル姫の攻撃を捌けるか否かと言った所。

ステータスの数値的に言えば肉体系の中では幾分マシだった体力・耐久力に關しても、何の実験もしてない所にいきなりあんな暴風の

ような攻撃の中に飛び込むセルフ耐久実験などはいいたくない。

では魔法はどうかと聞かれると、残念な事に完全な練習不足だ。精密制御などの運用に関する練習は出来ない上に、捕縛などといった器用な魔法は習得していない。

操れる魔法のラインナップは殺傷範囲と殺傷力と殺傷速度と殺傷密度に関してはゲーム内でも屈指の取り合わせだという自負があるが、その代償として妨害だの補助だの捕縛だのこういう状況で役立つような魔法はゴミ箱ヘダंकしていたのが俺のゲーム内での成長方針だ。

元のステータスを考えれば何を撃ち込んでも九郎は一発では死にはしないだろうが、だからと言って吹き飛ばすのは些か気が引ける。そもそも、余り強烈な物を撃ち込むと城がヤバい。かと言って軽すぎる攻撃では止まるとは思えない。

ましてや九郎を狙うにしても、高速で動きまわっている姫君の軌道は俺の目からではアトラダムな軌道にしか見えず、迂闊に魔法を撃つては巻き込まない保証はない。

更に言うなれば最高にハイな状態になっている姫君に関しての耐久力は未知数。下手に撃ち込んだ魔法のせいで死なれては本末転倒だ。確かに止まる事は止まるだろうが、ケイト女史も息の根を止める事は望んでいまい。

つまりはお手上げ――

「……ん？」

「どうしました？ 何か良い解決案が！？」

「いや、今……」

今の思考で僅かに引つ掛かった部分がある。

リゼル殿下の動きは確かに速く鋭い。だがそれは、『一撃ならば俺でも捌ける可能性がある』レベルの速さで鋭さだ。

俺とて長きに渡るVRMMO経験のおかげで多少は体捌きに関する自負はある。

しかしそれは九郎のような変態的な技量ではなく、あくまで『ゲーム内で覚えた』程度の物だ。

加えて肉体系のステータスで見ると、レベルは同じでも前衛である九郎と後衛である俺では遙かな開きがある筈。

俺と九郎の間では技量・ステータスの双方で、比べるのも愚かしい程の差がある。

そうだ。違和感の原因はそこ。

俺と九郎の白兵戦における隔絶した実力差。そして俺がリゼル殿下の攻撃から感じる脅威度の程度。それら二つから導き出される両者の実力差と眼前の光景との落差。

つまりは殿下のあの攻撃は下方からの攻撃という要素があっても、九郎ならばある程度余裕を持って捌き得る筈——。

「——つまり、九郎の野郎……まだ本気を出していない？」

「ちょっと、解決策の話じゃないんですか!？」

「いや、解決策を得る為にも状況分析をしていたら嫌な結論になつて……しかしこのまま続けば、九郎の奴が上手い事リゼル殿下を鎮圧出来るんじゃないですかね？」

俺の呟いた言葉にケイト女史が噛み付いて来るが、いかんせん割り込む手段がない。

そもそも元のアルヴァトロスには『威力を絞る』だの『精密制御』だのという概念は無かった。

魔法や特技は基本的に味方を巻き込まないから精密制御を考える

理由は無いし、そうである以上はわざわざ使う魔法の威力を絞る理由も薄いのだ。

まあ姫が全力で攻めていても九郎に余力があるのなら、あの剣術馬鹿が下方からの高速連撃という変則攻撃に慣れた瞬間に勝負は決する。

実力差がその程度あるならば、さしたる怪我を負わずに鎮圧するのも難しくはあるまい。

そう読んで完全な傍観に移ろうとした俺だが、続くケイト女史の言葉に硬直する。

「——リゼル様もまだ、余力を残しております」
「……なんですと？」

雲行きが怪しくなってきた。

そう感じた俺の前で、奇しくもそのタイミングで状況が動く。

これまで攻撃を受け止めるのみだった九郎が、受けた瞬間に力任せに刀を薙ぎ払ったのだ。

つまりは『受け』ではなく『弾き』。

500Lv前衛戦士の腕力で行われたそれは、女性にしては長身のリゼル殿下を軽々と弾き飛ばす。

「——つつぁ!？」

「速いが軽い。——そして何より、そろそろ慣れて来た。やはり実戦に勝る訓練は無いな。最低限の調整は完了と言った所だな」

悲鳴と共に弾き飛ばされたりゼル殿下が、空中で器用に身を捻って足から地面に着地する。

着地後に更に剣を地面に突き立て制動をかけて漸く止まる勢いだ。それだけでも今の九郎の腕力の程が伺える。

そして口の端を僅かに歪めるだけの笑みと共に九郎が呟いた言葉に、俺は何故九郎が余力を残していたかを悟った。

いや、正確には余力を残していたわけではなかったのだろう。あれは必要な過程。あれは『慣らし』だ。

そもそも武術という物は達人であれば達人であるほど、見切りも動作も刹那の精密動作が重要になっていく。

つまりは、なまじ俺のような素人よりも九郎のような達人の方が、変化した身体能力に適応するのに時間がかかるということなのだろう。

実力を十全に発揮する為には精密動作が可能なレベルで身体に慣れる必要があるからだ。

そして九郎はこの姫との斬り合いの過程で、必要だった『慣らし』を実戦レベルまで終わらせたと言う事か。

その完了までの速度が早いのか遅いのかは俺には分からないが、真剣での斬り合い中にそんな事をする神経はイカれているというのは確定だろう。やはりこいつは本気で生まれる時代を間違っていたと思えん。

で、吹き飛ばされた先で九郎のそんな言葉を聞いて心底から嬉しそうに笑っているリゼル殿下も間違い無く同類だ。

「へえ……そうかなるほどそうなんだ。——『慣らし』？『慣らし』って言ったわね。私との戦いをそんな風に表現したのは貴方が初めて。腹が立つわね嬉しいわね何て言うのかしらこの感情。胸が高鳴るのよ張り裂けそうなの。貴方は私を負かしてくれるの？」
「多弁だな。別段嫌いではないが、お互い剣士だろう。剣で語る方が雅だと思うが」

「剣士？ あはははは、剣士、剣士か。ああうんごめんねごめんなさい。そうよねそうよね、そう見えるわよね——」

大変気を遣って優しく表現すると非常にハイな——ごく一般的な感性で表現すると軽くネジの飛んだ笑みを浮かべながら語るリゼル殿下に対して、九郎は口元に僅かに笑みが浮かぶ以外は変わった様子もなく飄々と答える。

これがこいつなりの喜怒哀楽の『喜』だというのは、この世界には付き合いの長い俺以外に分かる奴は居ないだろう。つまりはこいつもネジが飛んでいる。

そしてこの後。

九郎の言葉に大きく口を開けて笑った姫が呟いた言葉と姿は、どこか未だに『アルヴァトロス』を基準としてこの世界を見ていた俺に、この日最大の衝撃を与える事となる。

「——別に私、剣士だなんて一言も言っていないわよ？」

そう言った直後に、リゼル姫の周囲に魔法陣が浮かぶ。

それ自体は見た事がある。神官系が得意とする『身体強化』系統の魔法、それもあり高位の物だ。

だが——

「そのレベルの白兵能力に、高位魔法！？ しかも魔法名を言わずに使ったのか！？」

——それは俺にとっては青天の霹靂だ。

アルヴァトロスは前衛は前衛、後衛は後衛と完全に分業された職業システムのゲーム。

他のゲームで言う所謂『勇者』や『魔法戦士』と呼ばれるタイプのキャラクターは存在しない。

一応無理をすればやってやれない事も無いが、それは所謂ネタキ

ヤラの域を出ない構成だ。明らかに同レベル帯の通常の前衛・後衛に比べて一枚も二枚も劣るキャラクターになってしまう。

ましてや音声認識での発動が常であったアルヴァトロスにおいて、使う魔法を声に出さずに発動させるなどというのはゲームシステム上ありえない事だ。

明らかにこの姫の能力は、アルヴァトロスというシステムに縛られていない。

いや、姫のみの話ではないのだろう。驚きに思わず叫んだ俺に対して、ケイト女史がきよとした表情で見上げて来ている。

『勇者ともあるう者が何故そこで驚くのが分からない』と、そんな表情。

つまり、無詠唱発動も白兵能力と魔法能力の混合保有も、この世界では有り得る事なのか。

だとすればこの世界とアルヴァトロスの関係は？

無数の疑問が頭に浮かぶが、同じくアルヴァトロスの世界を知る筈の九郎は口元の笑みを深くして呟く。

「——面白い。慣らしにしても多少物足りなかった所だ」

「あらそう？ それは申し訳なかったわ。殿方を満足させるのも良い女の務めなのね。それじゃ、これから満足させてあげる！！」

直後、両者の動きが爆発的に加速する。

地を滑るように飛ぶとしか表現しようがない動きをするリゼル殿下。そしてその変則的な動きに対して縮地としか呼べない踏み込みで追従する九郎。

漫画やゲームやアニメでしか見れないような、物理法則と人体の限界を置き去りにしたレベルの機動をする二人の間で一瞬の間に十を超える斬撃が交換され、剣と刀のぶつかり合う甲高い音がまるで

一繋がりのように連続する。

これまで『慣らし』——車で例えるならば一速程度しか使っていなかった九郎と魔法による補助で更に加速したりゼル殿下の動きは、既にLv500相応に強化された俺の視力である程度の距離を保って見えても、『辛うじて見える』でしかなくなっている。

先程までのように表情を確認する余裕など欠片も無い。更に言うならば、この距離でも互いの間で行き交う剣戟の半数も見えてはいない。

距離があるからギリギリ目で追えているが、近接戦闘の距離で相対すれば確実に初手から見失うだろう。それだけの速度だ。

ついでに激しい激突に伴い、巻き上げられた土や石や建材の破片などが飛んで来る。

それらをペシペシと腕で払い除けながら、そう言えばケイト女史は大丈夫かと背後を見やる。

彼女はしつかり俺を盾にする絶妙な位置取りで破片を防いでいた。見事な判断だが、彼女は本当に勇者を危険視しているのか。この微妙にぞんざいな扱いは何なんだ。

「……すいませんケイト女史。ぶっちゃけコレどーやって止めたらいいのか教えて下さい」

「と、とりあえず動かないで下さい！ 今動かされると、私は何を盾に余波から身を守れば良いんですか！！」

『勇者』を躊躇い無く盾と言い切るその感性は、一周回っていつそステキですらある。前言を撤回しよう。微妙にぞんざいどころか、完全無欠に遮蔽物扱いだった。

そんな感じで盾にされながら、前面に防御用のシールド魔法でも張ろつかと悩んでいる俺。飛礫程度ならば俺の反応速度で十分叩き

落とせるし、当たっても耐久力のステータス的に殆ど痛くないのだが、ウザい事はウザいのには違いは無い。

しかし前方の戦いは、俺がシールドを張る前に更に急展開を迎える。

これまで超高速で駆け回っていたリゼル殿下が動きを止め、地面に剣を突き立てたのだ。

「勝機ッ！！」

幾度と知れぬ激突の末にバランスでも崩したか。

九郎が短く叫びながら、剣を地に突き立てた姫へと刀を振るう。寸止めかはたまた峰打ちかであることを、俺は内心で殴打予定の神に祈った。

——果たして俺の願い通り、その刀は姫に届く前に動きを止める事となる。

しかしそれは九郎の手による寸止めではない。

もっと別の要因が、姫と九郎の間に発生していた。

「——^{ナウシズ チェイン}『束縛・氷の鎖』。……上級に分類される魔獣の動きも止めた私の切り札よ。満足して頂けたかしら？」

彼女が剣を突き立てた地面。そこから伸びた何条もの氷の鎖が九郎の腕と刀に絡み付き、その刃がリゼル殿下に届くのを寸での所で妨害している。

対する九郎の表情は驚愕。つまりこれは、奴も読み切れなかった慮外の一手。

その表情見たりゼル殿下は何故か残念そうな、泣き笑いのような表情を浮かべて呟く。

「でも残念。貴方を満足させる事は出来るのに、貴方も私に満足^{はいばく}を
与えてはくれなかったのね」

「なに……？」

「……どういう意味だ？」

「リゼル様、まさか……」

その言葉に違和感を抱いたのは九郎か俺かケイト女史か、或いは
その全員か。

三者三様に言葉を発し、しかしリゼル殿下はそれに答えずに地面
に突き立てた刃を抜く。

地から刃が離れても鎖は消えず、動きを束縛された九郎へ向けて
彼女は剣を振り上げ、振り下ろす。

「ごめんなさいね、勇者様。私の勝ちよ」

肩口を狙った一撃。身体強化と元々の能力を合わせたそれは流石
に命を奪う事は無かるうが、鎖骨程度は切断する勢いで振り下ろさ
れている一撃は戦闘継続不可能な傷を与えるには十分だろう。

少なくともリゼル殿下はそれを狙っている。この戦いに明確な勝
敗の線引きを付ける為に。

俺は思わず止めようと手を伸ばすが、伸ばした手が届く距離では
ない。

俺の背後のケイト女史は小さく悲鳴を上げるのみ。

だが次の瞬間に響いたのは、肉を断つ音と血が噴き出す音ではな
い。

いや、後者は小さく聞こえるが、それにしただって予想された惨劇
からは遥かに小さい。

「——え？」

「成程……これが『500Lv前衛のステータス』、か」

どこか苦々しく呟く九郎の肩口。

そこでは振り下ろされたりゼル殿下の剣が皮を裂き肉を断ち――

しかし骨を断てずに止まっている姿があった。

明らかに人外の頑強さ。前衛職の中でも高い部類に入る【剣豪】クラスのHPと防御力は、骨を断つつもりはあっても命を断つつもりは無かったらしい姫の攻撃を僅かな負傷のみで受け切っていた。

予想外の光景に呆然としたのは当の九郎以外の全員。

つまりは九郎のみがその驚愕からいち早く復帰し、行動を起こす。勢いをつけて刀を持った腕を引く。その動作で、上級魔獣すら束縛したという氷の鎖が砕け消えた。

「なっ……！？」

「そしてこれで――」

二重の驚愕に動きを止めたりゼル姫。

その首筋に、引いた動きから流れるような動作で刀を突き付ける。寝かせた刀は姫の首に触れており、そのまま引いただけでも盛大な血飛沫が飛び散るだろう。

そして姫には九郎ほどの馬鹿げた防御力はない―――― 筈だ。

「――俺の勝ち……か？」

「そうみたいね。……ふふっ」

納得いかなげな九郎の勝利宣言に、対するリゼル殿下は何故か清々しい表情で両手を挙げる。

恐らく彼女の心境としては『相手の防御力を見誤って、戦闘不能にするだけの攻撃が出来なかった私の負け』。

対する九郎の心境は『先に読み合いで負けた以上、こんな形では勝った気がしない』という所か。

浅く斬られただけの形となった肩の傷を軽く手で抑えながら、納得がいけないのが丸見えの不満顔だ。いつもの仏頂面で眉間に皺が三割増しで寄っている。

しかし何にせよ、両者にとっての戦いはこれで終わったらしい。決着云々どっちが勝った云々は、言いたい事があればこれから幾らでも言う機会があるだろう。

少なくとも半ば本気の斬り合いをやるよりは余程平和だ。

「まあ……何にせよ両者無事に終わって何よりか」

「貴方結局何の役にも立ちませんでしたね、シンヤ殿」

「……盾にはなっただじやないですか。労わって下さいよコンチクシヨウ」

そして結局のところ解説役と驚き役に終始した俺に対して、後ろの小さな文官殿は酷く冷たい目を向けて来た。

事実だが、俺を盾にしていた人に言われるのも些か納得がいかない俺であつた。

第八話：戦闘と決着と驚きと（後書き）

決着としてはこんな感じで。

『たれば』話と論評と、今回発生した疑問の解決と事後処理に
関しては次回に持ち越しです。

こうして見ると『勇者』であり元の『アルヴァトロス』最強クラスであった九郎が然程強く見えないかもしれませんが、『殺し合い』でやれば十回中九回は九郎が勝ちます。その辺についても次回。

オマケ：十段階戦力評価

□ 鹿島九郎 □

力：9

耐久：9

速度：8

技量：8

魔力：5

戦術：5

成長性：8

□ リゼル・フォン・クロスフォード □

力：5

耐久：4

速度：8

技量：9

魔力：6

戦術：8

成長性：7

第九話：魔法の話とうにようと

「速度は互角。技は剣では五分くらいだけど魔法を絡められる分私がやや有利。戦術でもやや私。力と耐久力とスタミナじゃ圧倒的にクロウ優位なのよね」

あの戦いから数時間後、今は日も落ち既に夜と呼ばれる時刻。リゼル殿下は俺の眼前で綺麗な正座で小首を傾げながら言葉を紡いでいた。

小首を傾げて頬に手を当てる、『私考えてます』のポーズ。似合う人がやれば似合うが、似合わない人がやれば奥歯に虫歯でも出来たかと心配されるだけの使いどころが難しいポーズだ。

しかし美人は得という事が、はたまた王族故の物か、或いは彼女自身の性質か。

そうしたポーズを取る彼女は、どこかしら気品を纏った姿として見る者の目に映る。

「つまりは私は一見すると幾らか優位に戦えるけど、攻撃を当てても豆鉄砲。対するクロウの腕力を考えると——まあ真剣での一撃が直撃すれば私程度の耐久力じゃ普通に戦闘不能。悪ければ即死じゃないかしら。つまり殺し合いなら私の方が格段に分が悪いのよ」
「だが先のは試合だ。その形式の中では貴様が有利に勝負を進め、そして読み勝ったのは事実だろう」

「お互いに相手の情報を知らなかったわよね。私がクロウの耐久力を知っていたら？ クロウが私の伏せ札を知っていたら？ ——
まあまた色々と変わっていたと思うわ。氷の鎖で絡め取った一撃だって貴方が寸止め前提で振らずに命を取るつもりで振っていれば、止め切れずに私が死んでいたんじゃないかしら。力込めれば拘束解けたって、反則な腕力よね」

「それも『たられば』の話だな。しかし一撃先に入れたのはそつちなだから、勝ちを名乗るのは気が引ける。その一撃を肩ではなく首、或いは目などの急所を狙われていたらどうなっていたかという所か」

そしてその横、我が相棒たる鹿島九郎は正座で両手を組んでいる。幼いころから武芸に親しんで来た身らしく、背筋を伸ばして正座をする九郎の姿は堂に入っていた。

腕を組みながら殿下の言葉に頷くその姿には貫禄のような物すら感じる。

——だが、まあ。

そこはかとなく漂う気品も威厳もへったくれもこの状況では意味などありはしないのだ。

「——で、お二方。言いたい事は私の心に欠片も響いてこない、そんな殺伐とした論評だけですか？」

何故ならリゼル殿下と九郎——改めバカAとバカBは先の私闘の反省の為に夕食を抜かれ、事後処理を頑張ったケイト女史（とついでに俺）の前で正座させられている状況なのだから。

後で後片付けをさせてしまっている騎士団の人にも謝りに行かねばなるまい。

ちなみにこの状況に至るまでは色々あった。

リゼル殿下はどうやらこの決闘の結果がどうなろうと自分一人の責任で全てを収める心算だったらしく、勇者——つまりは俺や九郎が怒った場合にでも、王様や王国に累が及ばないようにする為の絶縁状を前もって王様の寝室に投げ込んでから決闘に来る用意周到

ぶりだったらしい。

何故そこまで九郎との決闘に拘ったのか——更に言うなれば途中の言動から察するに、もしかしたら彼女は負けたかったのではないかなどという疑念はあるが、戦闘終結後にそれを聞いたケイト女史が爆発。そりやもう大爆発。

『もつと自分を大事にしろ』だの、『絶縁状を送りつけられても見捨ててなんかやらない』だの、泣きそうになりながら殿下に烈火の如き勢いで説教をカマしたのだ。いや、説教というか——内容から考えて、あれは彼女なりの不器用な愛情表現なのかもしれない。

最終的に半泣きになったケイト女史をオロオロするリゼル殿下が抱きしめてあやすような光景になったのだが——。

殿下もあれには焦ったらしい。とにかく平謝りでケイト女史をあやしていた。

聞く所によると今回の私闘の原因は殿下らしいので、今後自重してくれる事を切に望む。

そして公務で不在だった王様が執務室から戻って来る前に王の寝室の中から未開封の絶縁状を回収。これが誰にも見付からなかったのは幸いだろう。

騒ぎを聞いて中庭に駆け付けて来たヴァニングス殿率いる騎士団に対しては、ケイト女史が『姫の暴走』と説明した上で俺が全力で謝罪した結果として、厳重注意のみで許して頂いた。

プライドで飯は食えないし、幾ら向こうが挑んできたとはいえども一国の姫相手に真剣での斬り合いをした俺達『勇者』側にも明らかに問題があったのだ。謝罪で済むなら幾らでも謝るのが俺としては当然だ。

結果的に騎士団の方々に後片付けを押し付ける形になったのは本当に申し訳ないが、『ふむ、某の圧力の前では勇者と言えど形無しですな!』と笑うヴァニングス殿は大変満足そうだったから、まあ

良いだろう。

更にはその足で王様の執務室へ土下座行脚。

何故か張本人のバカAとバカBではなく監督役として俺とケイト女史が謝る方向で、俺と彼女の意見は一致していた。いや、何故かという言葉を置くのは正しくないだろう。あの二人に任せれば確実に事態が更に紛糾するからに決まっている。

こちらは気弱な王様らしい振る舞いで、『娘が迷惑をかけてしまつて、その、申し訳ないね……えーと、出来れば許して貰えればありがたいんだけど……』と謝罪合戦になった為に無駄に時間がかかった。

ともあれ事後処理が終わり、時間を置いた事で改めて怒りが湧いて来たらしいケイト女史。

改めて説教に移行しようとしているようだが——生憎こちらもちやうで、それなりに聞かねばならないであろう事がある。

「ケイト女史。悪いけど説教より先にこちらの疑問に答えて貰って良いか？」

「え？ えーと、疑問……そういえばシンヤ殿、リゼル様が魔法を使った時にやけに驚いてましたね。何か気にかかる事でも？」

「俺の知っている魔法とは詠唱を必要としない時点で発動のプロセスが違うし、そもそもこっちの常識では剣も魔法もなんていう万能型はまず存在しなかったんだよ。明らかに前衛の体捌きと剣術、神官系が使う高位の強化魔法、加えて最後のに至っては何が何だか全く分からん。何だあの氷の鎖。あんなの初めて見たぞ」

「……そう言われても困るわね……」

俺としては当然の、というより避けて通つたらまずいレベルの疑問。

それを聞いて困ったように答えたのは、ケイト女史ではなく当の『魔法剣士』本人であるリゼル殿下だ。

「まず、剣と魔法の組み合わせだっけ。まあ確かに少し珍しいけど、そこまで驚く事じゃないわよ。どちらも技術の一種って事には変わりないでしょ？ 二種類同時に習熟するのはは確かに手間だけど、適度な才能と適度な努力があれば誰でも使える技術よ」

「リゼル様ほどのレベルで両方をこなせる人は少ないですけどね」
「……………なるほど」

技術の一種。その言い方で妙に納得した。

つまりはこの世界では剣も魔法もただの技術だ。算盤と書道にでも置き換えればイメージし易いだろう。

両方同時に習熟するのは大変だが、適度な才能と適度な努力があれば双方共に級なり段なりを持つてゐる奴は、確かに現代社会にもそこそこ居た。感覚的にはそれに近いのだろう。

アルヴァトロスのように『経験点を溜めて』『ポイント割り振りでスキルを上げて』などといったシステムティックな管理がされる物ではないらしい。

まあレベルやステータスの概念が無かった辺りで、これはある程度予想して然るべきだったのかもしれない。それはつまり、『前衛』『後衛』と完全に分けられたクラスという概念も無いと言う事なのだ。

それはつまり、システムに縛られていたアルヴァトロスに無い成長の自由度がこの世界にはあると言う事だろう。俺達にとってのその具現が、剣と魔法を同時に使いこなすリゼル殿下の存在だった。

そう考えるとあの私闘も、今後は先入観を持って行動するのは危険だという良い授業になったと思いたい。

元より九郎があそこまで見事にリゼル殿下の手に嵌ったのも、『剣・魔法を同時に使いこなす相手は居ない』という固定観念、並びに『アルヴァトロス内に無い魔法（に、見えた）』という不確定要素があつたからだろう。

アルヴァトロス内では敵も『物理型』『魔法型』と分類されており、両方同時に操るように見える敵は『頭が三つで各々が魔法と物理戦闘と回復を担当』とかいうパターンくらいだったのだから。

要は固定観念から来る油断だ。それが無ければ、流石にあそこまで正面から引つ掛かるほどバカではない筈だろう。

いやまあこいつは確かに剣術馬鹿だが、真正面からしか戦えない猪ではないのだ。戦闘に関しては必要があれば覚えるし、次から同じ油断はしないだろう。麻雀の点数の計算は何年経っても覚ええないのだが。

しかし或いは俺達も訓練次第で、例えば俺が剣術を習熟する事や九郎が魔法を使う事も可能なのか。

『勇者』の成長性というのは今後を考えるに避けて通るべきではない課題だろう。

自己の能力の強化・拡充は、後ろ盾が無いに等しい俺達にとって目下最大の自己防衛手段だ。

「で、次ね。『束縛・氷の鎖』だけど……シンヤ、貴方『アイスコフィン』って魔法は分かる？」

「……知識だけなら。俺らの常識に照らし合わせてみれば、魔法使い系の中位拘束魔法だった筈だ。生み出した氷に相手を閉じ込めて行動不能にする魔法。ただし、自分と同レベル……こちら風に言えば同格程度以上の相手には殆ど効果を発揮しないし、格下相手でもせいぜい数秒の足止めが可能といったレベルの魔法だった筈だが」

完全拘束は優位過ぎると言うゲームバランスの為なのか。

アイスコフィンには自分よりも格下の相手には効果を発揮するが、相手のレベルが自分に近付けば近づくほど効果時間が短くなり、同格以上の相手には全くと言って良いほど効果を発揮しない魔法だった。

確かアルヴァトロスではレベルの低いフィールドを通り抜ける時、無駄な戦闘を避ける為に雑魚を凍らせて移動——などという際に使われていた魔法の筈だ。

そしてその俺の言葉に殿下は頷く。

どうやら魔法自体は同じ物であるらしい。先の殿下の身体強化魔法もアルヴァトロス内で見た事があったので予想はしていたが。

しかし、だとすれば氷の鎖は何なのか。

俺の知らない魔法かと思っていたが——アイスコフィンという既存の魔法の名前が出た所から考えるに、そうではないらしい。

疑問げな俺の表情に、リゼル殿下が肩を竦める。

「あれはアイスコフィンの応用よ。発動の際にイメージを組み替えて、全身を包む氷ではなく——質量は小さいけどその分密度の高い『鎖』という形にアレンジしていたの。……魔法のアレンジって、そっちでは無かった概念なの？」

「……その発想は無かった」

——魔法のアレンジ。

当然のように言われた言葉に俺は辛うじてそれだけの言葉を返すのみで、そこから先の句が継げなかった。

それはそうだ。アルヴァトロスは厳然とした『ルール』の元に運営された『ゲーム』である。

スキルや魔法の自由なアレンジなど認めていては、ゲーム balan

スが崩壊する。或いは認めるにしても、バランスのとり方が酷く難しくなる危険が高い。

だが、この世界ではそれが可能らしい。

イメージの組み換えと殿下は言っていたが、つまりは脳内でイメージすればどのような魔法も作れると言う事か？

否、そうだとすれば元とする魔法が存在する意味が薄い。あくまで『アレンジ』であり、元の魔法と違いすぎる魔法は創れないか効率が悪いと考えるべきだろう。

例えばリゼル殿下の氷の鎖も外見的には随分と変わっているが、元のアイスコフィンと『束縛』と『氷』という本質と属性は変わっていない。

だが、そうだとしても聞き捨てがならないほどの重要な要素に他ならない。

魔法使い職からすれば、喉から手どころか全身が飛び出そうな程に欲しいノウハウだ。

そしてこれらの会話から改めて確信した。明らかにこの世界はアルヴァトロスとは違う。

近似しているが先入観は捨てて臨むべきだろう。そうでなければ、下手をすると命が危ない。

この世界の住人はアルヴァトロスの高位キャラクターに比べて基礎スペックでは劣るが——この世界にはアルヴァトロスには無かった技術がある。

しかし九郎の例を見るに、基礎能力——即ち『ステータス』で見れば『勇者』は明らかにチートと呼べるスペックを持っている。ならばそのスペックにこの世界独自の技術、法則を組み込めばどうなるか。

——或いはその成長性こそが、『魔王』を倒し得る『勇者』という存在の本質なのではないか？

いや、その思考は流石に飛び過ぎか。だが調べてみる価値はある。

「その技術の習得は俺達に可能なのか——そして、歴代の勇者と魔王についても調べてみる必要が出て来たかもな」

「まあ、そういった頭脳労働は貴様に任せる。何か分かったら教えてくれ」

「お前も少しは考えるクソヤロウ」

そして思わず呟いた俺の言葉に、さらりと丸投げを宣言した九郎。こいつは少し本気で反省してくれないだろうか。具体的にはその窓から飛び降りてくれるとか実に良い。

ちなみにここは地上3階である。

そんな俺達の（いつもの）やり取りを見たりゼル殿下が溜息。

溜息を吐きたいのはこちらの方なのだが、ここでリゼル殿下の機嫌を損ねても困るので放置である。

「で、最後ね。詠唱の破棄はそこそ以上の腕を持つ魔術師の基本技術なんだけど……魔術師なのにアレンジもそれも知らない、か。

『勇者』っていったい何なのか分からなくなって来たわねホントに。

……まあ良いわ」

そして俺に向けて呆れたように頭を振ったりゼル殿下が話を進める。

次の議題もまた魔術師職である俺にとっては大きな疑問で、同時に大きな魅力である無詠唱魔法だ。

「貴方達の居た所でどうだったかは知らないけど、先にも言った通

り魔法はイメージなのよ。初めのうちはイメージを具体的に表現する為の切っ掛けとして魔法名を叫んだりするけれど、習熟して行くうちにイメージの仕方が自分の中で固まって来る。後は明確なイメージを持ちながら魔力を放出すれば、魔法は魔法名を叫ばなくても発動するわ」

「はいリゼル先生」

「何かしらシンヤ君」

「……貴方達、いつの間にか随分と馴染んでますね……」

軽く寸劇調で手を挙げた俺。そして即座に乗った殿下に対して、ケイト女史が呆れたような溜息を吐く。

しかし軽く手を挙げた俺だが、質問の中身は深刻だ。

「……魔力の放出ってどうやるの？」

「……え？」

「シンヤ殿、貴方は魔法使いでは……」

俺の言葉にリゼル殿下がぽかんと口を開け、ケイト女史は胡乱げな目で俺を見て来る。

今日一日でケイト女史から俺への扱いが『勇者』から『盾』、そして今まさに『駄目な奴』へと着実にランクダウンしていつている気がするのには気のせいではないだろう。

しかし実際問題として、どこの誰がVRMMOを遊んでいる最中に『魔力の放出』などという事を考えながらゲームをするのか。技名やら魔法名を叫べば発動するヴァーチャルなゲームの中で、『うおおおお！ 出る、俺の魔力よ！ 竜となって敵を討てええええ！』とかやっていたら、それは単なるイタい人が面白い人である。

つまりはアルヴァトロスと似て非なるこの世界に来るまで、俺は魔力などという物を意識した事が無かったのだ。

せいぜいステータス欄にあつて最大MPと魔法威力に係する数字だと言つ程度の認識だ。

そして俺の神妙な表情を目にして、冗談じゃないと悟つたのだらう。

ジト目で俺を見るケイト女史が、出来の悪い生徒を見る教師のような表情で語り始める。

「魔力の放出は魔法の発動プロセスで感じられる筈です。シンヤ殿も感じた事ありませんか？ こつ……身体から湧き出る『うによによーん』とした波動を」
「なにそれ」

ただし真顔で語る内容は、うねうねと身体を蠢かせながらの怪しい擬音だった。

冗談なのかと一瞬思うが、うねうね動いているケイト女史の表情は真顔だ。瞳は真剣そのもので、一片の曇りも無い。即ち本気と書いてマジだ。

仕方無しに『魔力の放出』とやらを感じる為に、身体をうねうね蠢かせてみる。

「う……うによによーん？」

「そうです。どうです、身体の奥底からうによによした波動は感じませんか？」

「いや、そんな表現し難い面妖な感覚はしないけど……」

「……そうですか。もう少し練習してみましょう。さあ、うによによーんです」

「う、うによによーん」

「どうですか？ ……駄目ですか。もう一度ですね」

「うによによーん！」

「違います、うによによに感が足りません。うによによとした感

覚に心を委ねるんです」

「うによによによーん！」

「……うーん、何がいけないんでしょうね？」

「うによによによによーん！！」

そして何も感じ取れず——敢えて言うなら九郎と殿下の冷たい視線を感じながら、うによによいながら身体を蠢かせる俺。

俺と向かい合いながら、こちらも身体をうによによ蠢かせるケイト女史。

こうして正面から見ると、はっきり言ってキモい動作だ。つまりは傍から見ている殿下と九郎からは俺も同類に見えているのだろう。死にたい。

そしてこちらにも真剣なのだろう。

魔力の放出のうによによ感を俺に教える為に一生懸命に蠢くケイト女史。

はっきり言って何かの儀式のような光景だろう。それも邪教とか、更に言うならかなりアングラな感じの。

「……とりあえず俺達はいつまで正座していれば良いのだ？」

「ケイトって目先の事に集中したら他が見えなくなるから、今なら抜け出しても気付かないんじゃないかしら？」

横合いから小声で交わされるそんな会話を勇者スペックで強化された俺の耳は拾っていたりもするのだが、逃げるなら勝手に逃げてくれと言わざるを得ない。

正直言つて奴らが説教を受けるか受けないかよりも、無詠唱で魔法を発動できるという事の方が重要だ。魔力の放出、イメージの形成。それらが為し得れば、魔術師職の俺は大きく出来る事の幅が広がる筈なのだ。

むしろこの珍妙不可思議な練習を見ないでいてくれるならば、そちらの方がありがたい。

そんな思考の結果、俺はこそそと逃げて行くバカAとバカBを見送り、ケイト女史と二人でうにように言いながら魔力の放出訓練と言う名の邪教の儀式に見える動きを繰り返すのだった。

Side Out

「——でも実際、ケイトのアレって効果あるのかしら？」

「あのウニヨラーなどと叫びながら形容しがたい動きをする、どこぞの原住民の奇祭のような動きか？」

「私はローパー系モンスターの求愛の踊りに近いと思うわ。……ともあれ、魔力の放出の感覚なんてのは個人差が大きいだよ。ケイトの場合『うにようによ』かもしれないけど、私の場合は氷が溶けて染み出すような感覚……って言えば良いのかしら。千差万別だからああいう教え方は効果無い筈なのよね」

工藤信弥は知らない。

脱出から数分後。彼が必死になってうにように叫んでいるのと同刻に、九郎とリゼルが交わした会話など彼は知らない。

燃料節約の為に基本的に暗い城の廊下を、リゼルが生み出した魔法の光を頼りに歩きながらの言葉だ。

『ライト』——光の玉を生み出す最下級の魔法であり、今はこの場に居ない信弥が使える数少ない攻撃系以外の魔法でもある。

特にアレンジも詠唱破棄もされていない普通の魔法だが、前衛戦士系であるが故に魔法の一つも使えない九郎からすればありがたか

った。

そして先にリゼルが呟いた言葉に、九郎が歩きながら疑問を問い返す。

「ならば正規の教え方とはどのような物なのだ？」

「んー……そうね。きちんとした魔術師の監督の元で、魔法名を言いながらの魔法の発動を繰り返す。そうして行くうちに魔力の放出の感覚が分かって来て、後は魔法を発動させずに魔力を放出する感覚だけを体内で再現できるようになるまで反復練習。アレンジ魔法に必要なイメージ練習も似た感じね」

「……あのケイト殿の教え方は、何がどうなつてあんなつたのだ？」

「あの子、正規の訓練を受けた魔法使いじゃないからね。片親が魔法使いだったから、小さい頃に真似してるうちに簡単な魔法が使えるようになったつてだけの文官だもの。だから正しい魔法使いの育て方とか知らなかったんじゃない？」

「その結果が『うのようによ』か」

「あはは……」

呆れ果てたような九郎の言葉に、リゼルは乾いた笑いを返すしかない。

ケイトは彼女にとっては自分を『王女』や『戦姫』などではなく一人の個人として見てくれる大事な友人で、幼い頃からの姉貴分でもあるのだが——いかんせん所々で感覚がズレている天然さんなのは、彼女からしても、いや、付き合いが長い彼女だからこそ否定し難かった。

「教えようとしてるのは善意なんだろうけど、ケイトは元々他人に物を教えるのが苦手な性質だしねえ。問題が分からない生徒に『どうして分からないのか分からない』とか言っちゃうタイプ」

「だとすれば戻って信弥に正しい魔法使いとしての練習法を教えてやった方が良いのでは？」

そして九郎が現在進行形で無駄な努力を続けているであろう相棒の身を案じる言葉を吐くが、対するリゼルは心底嫌そうな顔で九郎を振り仰いで曰く。

「貴方が行くなら止めないけど、今から戻ったら絶対ケイトに正座させられて説教よ？ 私は眠いの。絶対嫌」

「さらば信弥。せいぜい頑張っとうによいように叫んでくれ。俺は知らない」

「一瞬の停滞も無く見捨てたわね。まあ良いけど。……あー、夕飯抜きでお腹空いたから寝る前に厨房で何か食べ物取って来ない？」
「む、お供させて頂く」

そして音速で信弥を見捨てる決断をした彼らは、厨房から食料を頂戴する為にスニークミッションを開始した。

その結果として翌日、信弥から彼らの世界の料理について教わっているコック長が激怒する事になるのだが——それについては大きな問題ではない。

大きな問題となるのは、信弥が『魔法の練習』と信じて疑ってない『うによいよ叫びながらうねうね動く運動』を行っているのが城の内部で目撃されるようになった件だ。

九郎曰く『どこその原住民の奇祭』。リゼル曰く『ローパー系モンスターの求愛行動』。そして当の信弥本人曰く『アングラ系の邪教の儀式』。

そんな動きを奇声と共に繰り返す信弥を目にしたとあるメイドさんが恐怖のあまり失神し、そこから話が伝わって宰相であるオーギュストに話が行くまでの三日間。

信弥はひたすらに『うにようによ』言いながら、城の人々から『大丈夫かコイツ』という戦慄の混ざった目で見られ続けたのであった。

第九話：魔法の話とうにようと（後書き）

と、言うわけで全開の決闘で説明し切れなかった分についてです。感想で秀逸な表現をしてくれた方が居ましたが、現在の九郎と信弥は『勇者レベル1』とでも称すべき状態。身体スペック・保有魔力などはチート級ですが、この世界の技術などはまだ知らず、それ故に今後も伸びる要素が大いに残っているという状態です。

上手く説明できていなかったら申し訳ありません。
そして主人公何しとん。

閑話1：メイドさん、かく語りき（前書き）

閑話です。

感想でメイドさん視点の閑話の話が出たので、十話を書く前の筆
休めとして書かせて頂きました。

閑話1：メイドさん、かく語りき

失礼いたします、私はクロスフォード王国の王城で働くメイドの一人で御座います。

名前などを名乗るほどの者では御座いませんが、父が騎士団勤めでありその御縁から王様の厚情を賜り、王室仕えのメイドとして働かせて頂いております。

クロスフォード王家に我が家が受けた多大な恩についてはいずれ語る機会もあるかもしれませんが、この場におきましては私が勇者召喚後に遭遇してしまった事件について語らせて頂きたい思います。

事の始まりは『勇者』———この世界においてそう呼ばれる異世界からの被召喚者の方々が来てからです。

伝承によれば魔王を討つ為に呼ばれる勇者は、時には喚んだ王家に反旗を翻して多大な被害も与える事があった危険な存在であると聞いております。

遙か昔には北方の雄とも呼ばれたナウシズ皇国が没落した原因も、反旗を翻した勇者を討伐するのに万の精兵と領地の一部を永遠に失ったからだと聞いています。

しかしそのような危険な御相手であろうとも、勇者の力は魔王討伐に必要———な筈でした。

魔王が死に勇者のみが残ってしまった此度の召喚は歴史上例の無い事だそうです。

そして例に漏れず私がお仕えするクロスフォード王家もまた、召喚された勇者を擁する事になりました。

クロスフォード王国に召喚された勇者は殿方が御二人。

難しい顔をした精悍な容貌の方が、剣士のクロウ様。そして料理

が得意だそうで先日は厨房でコック長と激論を戦わせながら料理を作っておられた方が、魔法使いのシンヤ様です。

恥ずかしながら私は殿方と話すのが苦手です。加えて勇者という未知の存在であるお二方に対しては、どうしても恐怖が先行してしまいます。

幸いクロウ様は全く気にする様子はありませんが、シンヤ様は思わず怯えてしまった私を見て苦々しそうな表情をされておられた事がありました。

正直に申しますと、私は勇者の逆鱗に触れてしまったかと思い、その日は生きた心地がしませんでした。

しかしコック長の話を聞くに、そしてその後起こった姫様がクロウ様と争った事件の折の対応を同僚や騎士団の方から聞くに、シンヤ様は随分と穏健と言いましょか。伝承から想像していた勇者の枠には当て嵌まらない、気さくな苦勞人といった印象を受けました。

騎士団に所属している父上から聞く所でも悪い印象は無いとの事です。

だとすれば同僚や家族からは『蚤の心臓』などと揶揄される私ですが、今後は怯えずに接する事も出来るかも知れません。

少なくとも私が非礼を働き、王家や他の王城の皆様に迷惑をかけるなどあつてはならない事です。

頑張ろうと決意を新たに、私は姫様とクロウ様の決闘事件の翌日にシンヤ様の部屋へと朝食の御呼び出しに伺ったのです。

——しかし、そこで耳にしたのは世にも恐ろしい叫び声でした。

『うのようにー！』という私などでは到底意味の分からない叫

びがシンヤ様の部屋から聞こえたのです。

思わず私はその場から逃げだしてしまいました。職務放棄などあってはならない事ですが、恥ずかしながらその時の私は恐怖で私は何も考えられませんでした。

勇者であり魔法使いであるシンヤ様の叫ぶそれは、私どもでは到底理解の及ばない恐ろしき禁呪のように聞こえたのです。

幸いにして再度呼びに行くまでもなく、シンヤ様は些か憔悴した表情で食堂にいらっしました。

しかしあの憔悴した表情は、やはり先程の叫びは何か恐ろしき呪文を使っていたに違いない。そう考えた私は恐ろしくなったのです。そしてその恐怖を少しでも紛らわそうと、その日の夕方に私は同僚にシンヤ様の部屋から聞こえて来た叫びについて話しました。

そうすると、同僚は沈痛な表情で『私も聞いた』などと言うのです。

私は同僚の身が心配で、思わず泣き出してしまいました。禁呪の儀式を見られたシンヤ様が、私の大事な友人である同僚を害するのではないかと思ったからです。

同僚は驚き、私を宥めながら『大丈夫だ』と言いました。

何故その様な事が分かるのかと聞くと、どうやら今日だけでも同僚のみならず多くの人がシンヤ様のその御姿を見ていたとの事なのです。

騎士団の訓練場の端で騎士団の訓練用の木偶人形に向けて怪しげに蠢きながら、『うにようにー！』や『うにようにー！』や『うにようつきー！』などと、ウニヨ段変格活用とでも呼ぶべき様々な叫びを向けていたとの事でした。

私はたまたまそちらに出向く用事が無かったのですが、その姿は既に城中の話題となつていているとの事です。

確かに恐るべき禁呪などではないのでしょうか。禁呪だとすれば、訓練場で木偶人形相手に行う理由がありません。

しかし、ではそれは何なのか。

それはシンヤ殿の鬼気迫る奇行が余りに近寄り難い、或いは近寄りたくない物であるが故に誰も聞けず、未だに王城内では推論のみが飛び交っている状況なのだそうです。

父などは『軟体動物の死に際の痙攣』と呼び、同僚は『腹具合を崩した尺取虫の舞』と呼び、コック長は『スライムに飲まれた昆虫が消化される過程を表現しているだけ』と呼ぶ動きだそうです。

俄かには想像し難い動きですが、私の家族や友人知人全てに聞いても、『何をしているのか、何がしたいのかが全く分からない』とその日は皆一様に首を傾げていました。

そしてその翌日にも早朝から訓練場で同様の奇行に及ぶ勇者シンヤ様を見て、王城の皆は理解を諦めました。

一日に及ぶ修行、いえ、ウニヨ行の成果でしょうか。

怪しげな動きをするシンヤ様の動きのキレは、かつて旅芸人の一座で踊り子をしていたメイド長（52歳・既婚子持ち）をして『あれは良い踊り手になれるよ』と見当違いの太鼓判を押される程に磨き抜かれておりました。

そして叫びは『うによらっぱらっぱらー！』や『うによにやうにゆにゆにやー！』など更に複雑化しており、一流の踊り手が保証する腰のキレで存分にうねうねしながら奇声を発するシンヤ殿の姿に、同じ訓練場で訓練をする予定だった騎士団は集中を乱され全く訓練にならなかった——とは父の弁です。

奇行二日目にしてコック長などは、『あいつもまだ若いんだ……見知らぬ場所にいきなり連れて来られて不安なんだよ。だからあんな事をして自分を誤魔化してるんだ。優しくしてやろうぜ……な？』

と、慈母の如き表情で瞳の端に憐みの涙すら浮かべながら、城勤めの皆に説いて回っていました。

ちなみにその説は私の同僚を含めそれなりの人数に支持され、その日からどこことなく皆がシンヤ様に優しくなりました。

そしてシンヤ様の奇行が始まり三日目、つまりは姫様とクロウ様の決闘から三日が経過しました。

私は結局初日の朝食前のエンカウト以降は一度もシンヤ様に会わないまま過ごしておりました。恥ずかしながら、ここまで語った話は殆どが伝聞なのです。

ちなみに幸いにして姫様とクロウ様は純粋な武人として勝負したそうで、禍根は一切見られずに良く一緒に剣の鍛錬をしているとの事です。

それは大変嬉しい事です。勇者は確かに恐ろしい存在ですが、クロウ様もシンヤ様も人間です。

仲良くなれるならばそれに越した事は無いのです。

だからシンヤ様が多少奇行に走られても———多少ならず奇行に走られても、それを原因に彼を避けるような事はあってはならないのです。

そう思いながら中庭を歩いていた時の事であります。

あ、クロウ様と姫様の決闘で破壊された中庭は父様を含めた騎士団の尽力によって、とりあえず平らに均されております。随分と良い感じに耕されていたので、城勤めのメイド達の間で畑にでもしてしまおうかという話が出ております。

ともあれそのタイミングで———上から何かが降って来たのです。それも『うによおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！』という雄叫びと共に。

ダン、という足音と共に中庭に落下して来たのは、他ならぬシ
ン様でした。

彼はどうやら飛び降りて来たらしい三階の窓を見上げながら苦々
しげに呟いておりました。

「チツ、駄目か。もうこの際命の危機とかそういう物で手っ取り早
く覚醒しないかと窓から飛び降りながらやってみたが——あ、
おいメイドさんどうした——……」

私が聞き取れたのは残念ながらここまででした。
何故ならば、突然人が上空から降って来るといふ光景に驚いた私
は、父や同僚に揶揄される『蚤の心臓』ぶりを存分に発揮し、驚き
のあまり倒れてしまったからです。

私が倒れてしまった事が原因でシンヤ様の奇行がオーギュスト様
の耳にまで届き、そこからシンヤ様が何かの勘違いをなさっていた
らしいという事が発覚した——というのは、気絶から覚めた私に
対して同僚が語ってくれた言葉でした。

いったいどのような勘違いであったのかは謎ですが、私が気絶し
ている間にシンヤ様は全ての城仕えの者に対して『忘れて下さい』
と土下座行脚をしていたそうです。

——これが私の知る、勇者召喚後に起こった事件の一つの顛末
です。

この件についてはこのように記録として書き残し、王家の蔵書の
一部に残して今後勇者が召喚された場合に起こるかもしれないトラ
ブルの一つとして、歴史的資料であると同時に教訓書として残すと
オーギュスト様が判断されたそうです。

私のような者が見た事がそのように扱われるのは大変恐縮なので

すが、名誉な事と思い私が知る全てについて語らせて頂きました。
願わくば、これが未来のクロスフォード王国にとって有益な資料
となりますように――。

閑話1：メイドさん、かく語りき（後書き）

と、言うわけでチヨイ役であるメイドさん視点での閑話という話が感想で出た為、本来であれば第十話の序盤に第三者視点でちらつと書くつもりだった信弥の九話後の三日間の行動について、彼女の視点から書かせて頂きました。

ちなみに信弥はこれが『この世界における一般的な魔法の練習』だと信じており、その結果『外見は恥ずかしいが見られても殊更恥ずかしがるような物ではない』と判断。人目につく場所で練習を敢行した結果の惨事です。

第十話で信弥視点からのその三日間の彼の行動を少しだけ書かせて頂くつもりですので、それと併せて読んで頂ければ幸いです。

あ、ちなみに『勇者召喚時の対処マニュアル』みたいな感じで、悪意ゼロでこの件は歴史的資料に残されました。哀れ信弥。

なんかこの話を作るにあたって小心メイドさんの設定が多少増えましたが、名前は未だにありません。何故。

追記：次回は少し間が開く予定です。

第十話：治水事業（前書き）

お待たせしました。遅々としたペースで申し訳ありませんが、続きます。

第十話：治水事業

九郎と姫様の決闘から三日が経過した。

その間の俺の行動は、三文字で表現するなら『うによ』で説明が完了するだろう。

ケイト女史に教わった魔力放出の訓練の為に、ただひたすらに身体奥底に眠る（らしい）うによによとした波動を感じる為に、うによによ動きながらうによによ叫んでいる日々だった。

最初は部屋でやっていたのだが、どうにも感覚が掴めなかった。ならば攻撃魔法を放つ時のように何か的となる物があればと思い、騎士団の訓練場の端を借りたのはそれからすぐの話だ。

これが魔力放出を知る為の訓練だとすれば、誰もが通る道の筈。多少恥ずかしいが、見られても恥とを感じる事は無い筈だと自分を説得。

多少の恥を晒すよりも魔法の強化を取ったわけだ。

そして騎士団の訓練場にてうによによする事一日。

騎士団や城勤めの皆が驚いていたが、まあ無理も無いだろう。『勇者』——それも魔法職である俺が、魔法の初歩訓練とも言える行動をしているのだ。

『こいつ何で今更こんな事を？』みたいな感情を抱くのは当然の筈だ。

そして騎士団訓練場でうによによが二日目に至るに当たって、何故か城の人々が俺に優しくなった。

色々忙しいこの国の文官——ケイト女史とオーギュスト殿には会えていないが、初対面では勇者である俺達を疎んでいた筈のヴァニングス殿が、『……少し休んでは如何かな、シンヤ殿』と末期

病人を見るレベルの優しい目でウニョってる俺に語りかけてきたくらいだ。

まあこの人の場合の初対面の対応は、勇者を疎むと言うより王をないがしろにされるのが我慢ならなかっただけなのだろうが。

それ以外にもコツクのおっさんから『辛い事があつたら言えよ。な?』などと言われたり、城内で会うメイドさんや騎士や兵士の人達から温かい視線と共に『頑張れ』『負けるな』などと言われるようになったり――。

いや待て。

あの視線は温かいと言うよりむしろ生温かいと表現すべきだったような気がする。

更に言うならば、『優しい』と言うより『可哀想な物を見る』目だったような気が――。

「……いや待て。あれは覚えが遅い俺を憐れんでいるだけだ。それ以上の意味は無い筈。……何を考えてるんだ、俺は」

胸中に湧きあがった嫌な予感を振り払うように首を振る、決闘三日後の朝。

そろそろ異世界に来てから一週間が経過しようとする頃であった。流石にこれ以上勇者の魔法使いが魔法の基礎も出来ていないというのは外聞も悪かろう。

「修行と言えばとりあえず、命の危機だよな」

――ここらで一つ危機からの覚醒とかを狙って窓からでも飛び降りながらやってみるか。

そんな事を考え実行し、そしてメイドさんに気絶された。これが異世界に來た勇者だとは誰も思ふまい。

自分で客觀的に自分の行動を見たならば、單なる馬鹿、或いは馬鹿、もしくは馬鹿だろう。

無詠唱とアレンジ魔法。その二つに視野を囚われ、周囲の観察を行った結果である。

視野狭窄とはかくも恐ろしい物なのかと思っていると、別のメイドさんが俺を呼びに来た。

先の一件に関してオーギュスト様が呼んでいるとの事である。

行動がフリーダム過ぎたのか、俺が魔法使いながらも魔法の基礎もなっていないという事に気付いたのか。それともその両方か。

どれにしろ余り嬉しい話題にはならなかつたが、一国の宰相殿からの呼び出しである。

受けないという選択肢は無い為、些か渋々ながらも俺はオーギュスト様の部屋へ向かったのだった。

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

「座ってくれ」

「はあ」

——さて、先述した通りにオーギュスト様の部屋に来たのだが、なんとも会話が直球というか、単語を続けない人である。

粗末な机の上に書類が山と積まれた『だけ』の部屋。それがオ―

ギュスト様の執務室であつた。

拳句の果てに椅子までもが部屋の主の分だけしか無い為、部屋の入り口近くまでその椅子を引っ張り出して俺に座らせている今はオーギュスト様が俺の前に仁王立ちしている状態だ。

いや、仁王立ちという意図は本人には無いのかもしれないが、目付きの鋭い神経質そうな壮年男性であるオーギュスト様。彼にやや上から見下されているこの状況は、彼本人の容姿・雰囲気と相まってどう見ても俺がこれから説教される図にしか見えないであろう。

「話は聞いた」

「どの話でしょうか？」

「辛かったのなら言ってくれば良い物を」

「あの、申し訳ありませんオーギュスト様。真剣に話が見えません」

そしてそんな状態からオーギュスト様が繰り出した会話は、円滑な会話に必要な筈の挨拶も交渉事でありがちな牽制のジャブもなく、ただひたすらにストレートであつた。余りにストレート過ぎて話されている俺が内容の把握も出来ないほどに。

ストレートはストレートでもボクシングではなく野球のストレート。しかもキャッチャー（俺）がキャッチ出来ない暴投であつた。

話と言うと城の人に迷惑をかけた——具体的には気絶したメイドさん——件か。

はたまた俺が魔法の基礎を練習している件か。

それとも城の上層部に許可を取らずコックのおっさんに料理を教えたのも、可能性としては考慮されるべきだろうか。

しかしそう思考する俺の前で、オーギュスト様は僅かに目を細め——神経質そうな顔に憐憫の表情を僅かに浮かべ、俺に向けて

言い放つたのだ。

「貴殿が精神を病んだと」

「ちよつと待て」

思わず完全に素で突っ込んだ俺は悪くはないだろう。いや、悪いのだろうが。

だがしかし、それほどまでにこの会話のドッジボールは俺にとつては衝撃だった。

誰がいつ病んだと言うのか。いや、確かに多少精神的に急き過ぎていた感があり、それ故に窓から飛び降りながら修業などという馬鹿はやったが。

いったいどこから飛び出たそんな悪評。

九郎か。やはり九郎か。次点でリゼル殿下がありそうな線だが。内心でブラックリストを作成しつつ、口調に気を付けてオーギュスト様に問いかける。

「……オーギュスト様。それは誰が？」

「城のほぼ全員からの連名だが」

どうやら何故か俺はいつの間にか社会的に死んでいたらしい。思わず死んだ目で窓から見る空は、ム力付く程に青かった。

——そしてそれから体感時間でおよそ一時間。

俺は口数の少ないオーギュスト様から話の内容を聞き、平たく言うところこの国を捨てて誰も俺を知らない場所まで逃亡したくなった。

「ケイトは善意でやったのだろつ。悪く思つな」
「……はい……」

間違つた——それも恋と変を間違えるレベルで間違つた練習法をしていたと気付き絶望する俺。

ああ、確かに俺の姿は見知らぬ異国に連れて来られた若人が、その精神的ストレスから壊れたように見えたのだろつよ。って言うか誰か教えてくれよ。

そして落ち込む肩を叩くオーギュスト様は、字面こそぶつきらばうだが口調からは優しさ——というよりは憐れみが溢れていた。

魔力の放出を知る為には魔法を使いその感覚に慣れる事が第一だと言つ。

放出の感覚は個々人ごとに違い、ケイトの場合は『うにようによ』なのかもしれないが、俺の場合はまた違つたろつ——との事。

「放出の感覚……ねえ」

オーギュスト様へ対して言うわけでもなく呟きながら椅子から立ち上がり、その椅子をオーギュスト様の方に押しやる。『座りますか?』と聞くと頷きだけで返事をして座つた。勇者相手だからと言つた遠慮など、この人は最初から欠片も見えない。

この人のこういう率直な所が人間関係で良い方に働くか悪い方に働くかは相手次第だろうが、俺個人としては楽で良いし、尚且つ『勇者』として見られていない気がして気分が良い。

椅子を机の所に持つて行き、そこで椅子に座るオーギュスト様。あの位置で机に向かい、無言で執務をこなすのがこの部屋に居る彼の平常なのだろう。

書類の山を前にして座るオーギュスト様は、この殺風景な部屋に不思議と合っていた。

「魔法が使えないわけではないのだろう？」

「魔法名を言えば発動出来ますよ。あんまり強烈な物はこっちに来てから一度も使ってませんけど」

「強烈？」

「俺は元々広域破壊専門の魔法使いですからね」

そして書類の山の向こうから投げかけられた言葉に溜息と共に応じる。

思い出すのはこの世界に来たばかりの時——と言っても今もそれほど来てから時間が経っているわけではないが——城から離れた騎士団の訓練場と言う名の原っぱで実験した時の事だ。

範囲攻撃らしい範囲攻撃がソニックブレイド程度しか無かった九郎はまだ良い。

一撃の威力はともかく、殺傷範囲は最初の一撃が最大規模だったのだ。一通りスキルは試して、『後は慣れか』などという事も言っていた。

慣れに関してはリゼル殿下との決闘を含め、あいつならば程無くどうにかするだろう。

武の方面で言えば、俺はあいつを全面的に信頼している。

問題は俺の方であり——ここから先は多少システムティックな話になる。

アルカディアにおいて高位魔法職は幾つかあるが、俺の【賢者】セージは【大呪術師】と対を為す後衛火力特化職だ。差は色々あるが真つ当なスキルの組み合わせで成長した場合、威力は五分。そこから先は範囲の【賢者】に対して、属性種類の【大呪術師】と考えれば分

かり易いだろう。

イベントで起こる大規模会戦などでは【賢者】が重宝されるが、普段の狩りでは相手がどんな敵だろうとも対応出来る【大呪術師】の方が有利。後は使い手の趣味次第だ。

問題は俺自身が取った【賢者】の常動型スキルである『範囲強化』^{パッシブ}。それも真つ当な成長なら途中で止めるスキルを、補助魔法系統を捨てた分で浮いたリソースを注ぎ込んで無駄に限界まで上げた『範囲強化』だ。だってリソース余ってたんだもん。

で、その結果何が起こるかと言えば、単体攻撃である筈のファイアボールを撃つたら半径10mの原っぱが焼き払われた。単体とは果たして何だったのか。慌てて別の魔法で水を出して消火したが、最初から広域魔法を使わなくて幸いだった。

明らかにこの世界はゲーム内に比べてエフェクトが演出過剰になっていると思う。

いや、ゲーム内では能力やスキルの向上に比したエフェクトの増強が過少だったのだろうか？ グラフィックの表示リソースや、プレイ時の快適さの為———と言うのは有り得る可能性であろう。しかし問題は、俺の扱う魔法の全てが現状では範囲過多となっている事。

例外はゲームスタート時から魔法職が必ず覚えている一部非攻撃魔法くらいだ。

例として挙げれば灯りが付きます。飲み水が出ます。ライター代わりになります。便利だねコンチクショウ。

「———ぶっちゃけ使い難いんですよ。広域高威力がモットーだったもんですから、練習する場所にも事欠く始末で。……だからこそ、早めにアレンジ魔法なりを覚えて威力を抑えて扱えるようにしたいんですけど」

「贅沢な悩みだ」

「ですかね」

「ああ」

それきりオーギュスト様との会話は止まる。

別段沈黙を厭う性質でもないので、それ自体は別にかまわない。

俺としても正しい無詠唱魔法の練習法が分かったならば、考えた
い事もある。

低位の攻撃魔法、或いは先述の通りに魔法職が必ず覚えている『
ライト』等の非攻撃魔法で練習するのが正解か。

こういう異世界召喚のテンプレでは主人公は強大な力を自由自在
に操っていたものだが、生憎と俺の場合は完全に持て余している。

何せ『範囲強化』は常に動作する常時作動型のスキルだ。俺の意
思での切り替えは出来ない——ゲームでもそうだったし、実際に
試しても出来なかった。或いは出来るのかもしれないが、無詠唱魔
法やアレンジ魔法に比して解決への糸口すら発見出来ていないのだ。
現状では無理と判断して動くべきだろう。

俺は現状、兵器に例えるならば800mmドーラ列車砲のような
もんだ。

威力と範囲はともかくとして、小回りからは果てしなく縁遠い武
装。頼むから拳銃レベルの殺傷範囲の魔法が欲しい。最下級魔法で
もグレネードランチャー程度の火力っていったい何事だ。

アルヴァトロスでは魔法防御の固い相手にはそれでも火力不足だ
った事もあるので、この世界でもそういう現象はあるものと考えて
対策は考えておくが——だとしてもまず、小回りが利く戦闘手段
を求めるのは間違っではないだろう。

戦闘手段から考え始めるのを野蛮だと思っなかれ。

別段戦闘がしたいわけでもないが、召喚された勇者の立場を考えると今後も争いと無縁でいられるとは到底思えないのだ。

それに殺しがしたいわけでもない以上、『殺さずに制圧できる手段』の獲得は必須だろう。

「……オーギュスト様。またいつぞや借りた練習場を借りても良いでしょうか？」

「条件がある」

「なんなりと」

結果として思考を纏めた俺が選んだのは、とにかく魔法を繰り返して使つての反復練習。

その為の許可をオーギュスト様に求めた所、返って来たのは向こうからの条件提示。

驚くような話ではない。『勇者』という存在は先方にとって非常に繊細で厄介な危険物なのだろうが、それ故にいつまでも飼ひ殺しておけるような物でもない、この切れ者の宰相様は理解している。小国であるこの国ならば尚更だ。俺達を——特に戦力として申し分の無い九郎をいつまでも遊ばせておく余裕も無いだろう。

いずれ何らかの形で互いの立場を確定する為の、王国側からの要求があるであろう事は予想していた。来るとすれば恐らくはオーギュスト様からだろうというもう一つの予想的中だ。

故に即答。

その俺に対して、宰相様は僅かに目を細めて見せる。

「驚かんのだな」

「予想された事です。それに、いつまでも働かずに無聊を囲うのは気が引けます。俺の出身地では働かざる者食うべからずという言葉もありますし」

「そうか」

言葉少なに返すオーギュスト様だが、基本は無表情なままでその口元に僅かな笑みが浮かんでいた。

「そうまで冷静に返されると、勇者に話を切り出すタイミングを伺っていた私が馬鹿に見える」

「用心深いのは悪い事ではないでしょう。ある程度俺や九郎の人となりを知った今は、タイミングとしては適切だったかと」

「そうか。――では改めて条件を出そう」

そして僅かな、しかしオーギュスト様にしては恐らく非常に珍しい笑みを消し、いつもの無表情に戻った鉄面宰相殿が俺に向かって『条件』を突き付ける。

「ケイトに従い城を出て、治水事業を行って欲しい。大規模な魔法が得意というならば良い練習になる筈だし、人手を出して行うよりも早く安く終わる筈だ」

「御意。詳細はケイト殿に聞けば宜しいので？」

「ああ」

交渉は成立。

オーギュスト様は話は終わりとでも言うように机の上の書類に目を落とし、その様子に苦笑しながらも俺は一礼して部屋を出る。

悪い話ではない。むしろ破格だ。

これまではこの城の中と僅かな周辺のみが俺や九郎にとっての『この世界』だったが、そこから出て国の中を見る絶好の機会だろう。

「実際どうなんだろうな、この国とか」

小声で呟きながら思考を巡らせる。

王様の性格があれだし、宰相様も文官筆頭も武官筆頭も癖こそ強いが実直な人物揃いだ。

悪政を敷いているとは考えにくいが、自分が召喚された国の現状だ。興味がある。

自分から口を出すようでは余計な野心があると考えられかねないが、向こうから手伝いを求めて来た今は絶好の好機。

この国の状況をついでに見させて貰おう。

「——ま、その為にもまずはサントイッチイターの所だな」
ケイト

この国の人々に対する信頼は生まれつつある。好意もある。

しかし無条件にこの身を寄せるほど、俺は御人好しでもなければ無鉄砲でもない。

最も、向こうもその程度は分かっているだろうが。

内心でそう思考しながらも、俺はサントイッチイターこと文官筆頭であるケイト女史の元へ足を運ぶのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5102q/>

クロスフォード王国乱入記

2011年10月2日03時20分発行